

楠・荒田町遺跡

第53次発掘調査報告書

2014年3月

神戸市教育委員会

序

平成 24 年にNHK大河ドラマ「平清盛」が、一年間を通して放映されました。そのため一昨年の神戸では平清盛ブームが起り、たいそう盛り上りました。

ブームの結果というのではありませんが、平成 24 年以降、現在まで平氏との係わりが極めて強い遺跡である祇園遺跡、雪御所遺跡、そして楠・荒田町遺跡の 3 遺跡では、平氏と同時代の遺構や遺物が数多く確認され続けています。その現地で発掘調査に至った要因はそれぞれ全く別々なのですが、こうも連続すると平氏からの何か強い導きやメッセージがあるようにも感じられます。

それらの中、今回報告する楠・荒田町遺跡第 53 次調査でも多くの成果が得られました。報告書としては今年度になりましたが、現地での調査の進捗、及び報告書の刊行に当たり、関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月
神戸市教育委員会

例 言

1. 本書は神戸市兵庫区荒田町1-6・1-7で平成24年度に実施した、楠・荒田町遺跡第53次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は民間の共同住宅建設に先立つものであったが、調査や本体工事の関係上から調査面積を2分した。西側と中央部分を先行して調査を実施し、調査完了後に東側の調査を実施した。
3. 現地調査機関は平成24年9月27日～11月30日であった。
4. 現地での遺構写真は閑野 豊と、一部木棺墓を丸山 潔が撮影した。
5. 本書に使用した標高は東京湾平均海水面T.P.を使用した。
6. 使用した方位及び国土地標は、国土地理院法（昭和26年6月1日法律第180号）の施行令（昭和27年3月31日政令第59号）第二条及び別表第一によって定められた平面直角座標系中国東Vである。現在世界測地系を採用しているため、日本測地系を使用した近隣の過去の調査成果と合成図を作成する際、どちらかの測地系に統一して変換する必要性がある。
7. 出土遺物の整理作業及び報告書作成は平成25年度に実施した。
8. 出土遺物は西大寺フォト杉本和樹が撮影した。
9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:25,000地形図『神戸首部』・『神戸南部』、神戸市発行の1:2,500『諒訪山』・『神戸駅』・『兵庫』の各々一部の他、清水靖夫編・柏書房刊『明治前期・昭和前期神戸都市地図』に収録されている1:10,000に編集された参謀本部陸軍部測量局発行の仮製図『神戸』、同じく内務省地理局測量課発行の1:5,000『兵庫神戸実測図』の各々一部である。
10. 発掘調査で出土した遺物と、図面・写真等の記録類は神戸市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。各方面での資料の幅広い活用を希望するとともに、公開に努めたい。
11. 本書の第3章第3節の金属製品及びその保存科学的調査に関する部分の執筆は中村 大介が、その他の部分の執筆及び編集は閑野 豊が実施した。

本文目次

序	
例言	
目次	
第1章　はじめに	1
第1節　調査に至る経緯と経過	1
第2節　調査組織	3
第2章　遺跡の歴史的環境と立地	4
第1節　楠・荒田町遺跡と周辺の遺跡	4
第2節　遺跡と地理的環境	8
第3章　調査成果	12
第1節　基本層序	12
第2節　第1遺構面	13
第3節　第2遺構面	14
第4節　第3遺構面	33
第5節　遺物包含層	38
第4章　まとめ	42
写真図版	45
報告書抄録	79

図版目次

第1図　楠・荒田町遺跡位置図	1
第2図　調査地点周辺の現地形図（1：5,000）	2
第3図　調査地点位置図（1：2,500）	3
第4図　周辺の主な遺跡（1：25,000）	7
第5図　明治18年頃の周辺の地形図（1：10,000）	9
第6図　明治14年頃の周辺の地形図（1：5,000）	10
第7図　楠・荒田町遺跡の範囲と推定中位段丘面の範囲（1：8,000）	11
第8図　南壁主要部土層図（1：50）	12
第9図　第1遺構面平面図（1：160）	13
第10図　第2遺構面平面図（1：160）	14
第11図　掘立柱建物S B201 平面図・断面図（1：80）	15
第12図　掘立柱建物S B201 出土遺物（1：4）	16
第13図　掘立柱建物S B202 平面図・断面図（1：80）	16
第14図　掘立柱建物S B203 平面図・断面図（1：80）	17
第15図　掘立柱建物S B204 平面図・断面図（1：80）	18
第16図　溝S D201 平面図・断面図（1：40）	19
第17図　井戸S E201 平面図（1：80）	19

第18図	井戸S E201断面図（1：80）	20
第19図	井戸S E201出土遺物1（1：4）	21
第20図	井戸S E201出土遺物2（1：4）	22
第21図	土坑SK201平面図・断面図（1：50）	22
第22図	土坑SK202平面図・断面図（1：50）	22
第23図	土坑SK202出土遺物（1：4）	23
第24図	土坑SK203・206・207平面図・断面図（1：50）	23
第25図	土坑SK204・205平面図・断面図（1：50）	23
第26図	土坑SK206出土遺物（1：2）	24
第27図	土坑SK208・209平面図・断面図（1：50）	24
第28図	土坑SK210平面図・断面図（1：50）	24
第29図	ピットSP218平面図・断面図（1：40）	25
第30図	ピットSP229平面図・断面図（1：40）	25
第31図	ピットSP236平面図・断面図（1：40）	25
第32図	ピットSP259平面図・断面図（1：40）	25
第33図	ピットSP218・229・238出土遺物（1：4）	25
第34図	墓ST201～203平面図・断面図（1：20）	26
第35図	墓ST201～203出土遺物（1：4・1：2）	27
第36図	集石遺構SX201平面図（1：10）	28
第37図	集石遺構SX202平面図・断面図（1：10）	28
第38図	第2遺構面出土金属製品（1：2）	30
第39図	和鏡の螢光X線分析スペクトル	31
第40図	第3遺構面平面図（1：160）	33
第41図	堅穴建物SB301平面図・断面図（1：50）	34
第42図	土坑SK301平面図・断面図（1：50）	34
第43図	土坑SK302平面図・断面図（1：50）	34
第44図	土坑SK303平面図・断面図（1：50）	35
第45図	土坑SK304平面図・断面図（1：50）	35
第46図	土坑SK305平面図・断面図（1：50）	35
第47図	土坑SK306平面図・断面図（1：50）	35
第48図	土坑SK307平面図・断面図（1：50）	35
第49図	土坑SK308平面図・断面図（1：50）	36
第50図	落ち込みSX301平面図・断面図（1：80）	36
第51図	落ち込みSX301出土遺物（1：4）	36
第52図	上層遺物包含層出土遺物1（1：4）	38
第53図	上層遺物包含層出土遺物2（1：4・1：2）	39
第54図	下層遺物包含層出土遺物（1：4）	41
第55図	平氏関連4遺跡と周辺微地形復元図（1：10,000）	43

表目次

第1表 和鏡の蛍光X線分析結果 32

写真図版目次

写真図版 1	1. 土坑基S T201（西から） 2. 土坑基S T201出土遺物	45
写真図版 2	1. 木棺墓S T202（西から） 2. 木棺墓S T202出土遺物	46
写真図版 3	1. 木棺墓S T202合子 2. 木棺墓S T202合子蓋 3. 木棺墓S T202和鏡鏡背 4. 木棺墓S T202和鏡鏡面	47
写真図版 4	1. 木棺墓S T203（南から） 2. 木棺墓S T203出土遺物	48
写真図版 5	1. 第1遺構面全景（南から） 2. 第1遺構面ピット群（南から）	49
写真図版 6	1. 第2遺構面全景（東から） 2. 第2遺構面全景（南西から）	50
写真図版 7	1. 掘立柱建物S B201・204（南から） 2. 掘立柱建物S B201の一部（西から）	51
写真図版 8	1. 掘立柱建物S B202（北から） 2. 掘立柱建物S B203（南東から）	52
写真図版 9	1. 井戸S E201掘形形状（南から） 2. 井戸S E201掘形内部（東から） 3. 井戸S E201掘削停止深度（東から）	53
写真図版 10	1. 土坑SK201・202（南西から） 2. 土坑SK203（東から） 3. 土坑SK204（東から）	54
写真図版 11	1. 土坑SK205（東から） 2. 土坑SK206（東から） 3. 土坑SK207（東から）	55
写真図版 12	1. 土坑SK208（北東から） 2. 土坑SK209（北東から） 3. 土坑SK210（南西から）	56
写真図版 13	1. 木棺墓S T201（南から） 2. 木棺墓S T201副葬遺物配置（北から）	57
写真図版 14	1. 木棺墓S T201遺存足の骨（西から） 2. 木棺墓S T201完掘（南から）	58
写真図版 15	1. 木棺墓S T202（南西から） 2. 木棺墓S T202副葬遺物配置（西から）	59
写真図版 16	1. 木棺墓S T202副葬合子・和鏡・鉄刀子（南西から） 2. 木棺墓S T202副葬土器（西から）	60
写真図版 17	1. 木棺墓S T203（南から） 2. 木棺墓S T203（西から）	61
写真図版 18	1. 木棺墓S T203副葬土器配置（南から） 2. 木棺墓S T203副葬土器（東から）	62
写真図版 19	1. 集石遺構S X201（南から） 2. 集石遺構S X202（西から）	63
写真図版 20	1. 第3遺構面全景（南から） 2. 第3遺構面全景（南西から）	64
写真図版 21	1. 反転部第3遺構面全景（南から） 2. 反転部第3遺構面全景（南西から）	65
写真図版 22	1. 壁穴建物S B301（西から） 2. 壁穴建物S B301断面（南から）	66

写真図版 23	1. 土坑SK301・302（北東から） 2. 土坑SK303（南から）	
	3. 土坑SK304（北東から）	67
写真図版 24	1. 土坑SK304・306・307・落ち込みSX301（北東から）	
	2. 土坑SK305（東から） 3. 土坑SK308（南西から）	68
写真図版 25	1. 南壁土層西半（北東から） 2. 南壁土層東半（北東から）	69
写真図版 26	1. 掘立柱建物SB201出土遺物 2. 井戸SE201出土遺物1	70
写真図版 27	1. 井戸SE201出土遺物2 2. 土坑SK202出土遺物1	71
写真図版 28	1. 土坑SK202出土遺物2 2. ピットSP218・229・236出土遺物	
	3. 土坑基ST201出土遺物 4. 木棺墓ST202出土遺物	
	5. 木棺墓ST203出土遺物	72
写真図版 29	1. 第2遺構面出土金属製品 2. 第2遺構面出土金属製品（X線）	73
写真図版 30	1. 木棺墓ST202出土と鏡鏡背 2. 木棺墓ST202出土和鏡鏡面	
	3. 木棺墓ST202出土と鏡（X線）	74
写真図版 31	1. 和鏡鏡背平絹残存状況（マクロ：1.2倍）	
	2. 和鏡鏡背平絹残存状況（マクロ：1.2倍）	
	3. 和鏡鏡背平絹残存状況（マクロ：4倍）	
	4. 平絹縫糸横断面（透過光：50倍）	
	5. 平絹縫糸横断面（透過光：100倍）	
	6. 平絹絆糸横断面（透過光：50倍）	
	7. 鉄刀子65把木質木口断面（透過光：50倍）	
	8. 鉄刀子65把木質板目断面（透過光：100倍）	75
写真図版 32	1. 落ち込みSX301出土遺物 2. 上層遺物包含層出土遺物1	76
写真図版 33	1. 上層遺物包含層出土遺物2 2. 下層遺物包含層出土遺物1	77
写真図版 34	1. 下層遺物包含層出土遺物2 2. 出出土鍾類	
	3. 出土石器類1 4. 出土石器類2	78

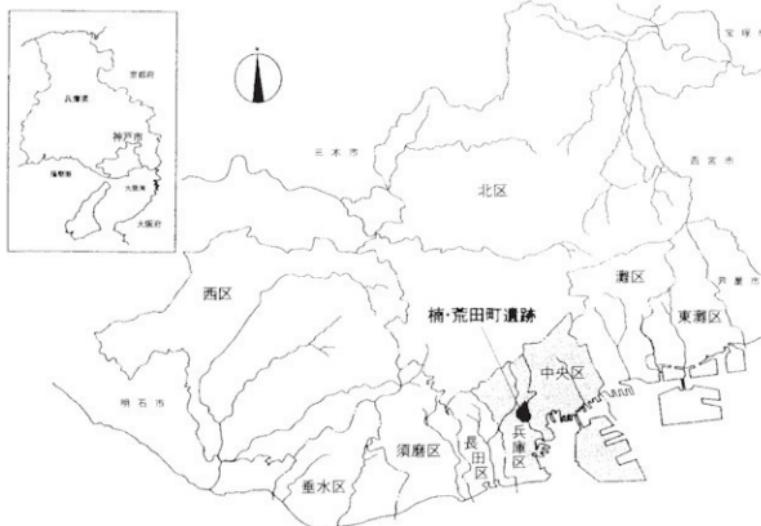
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

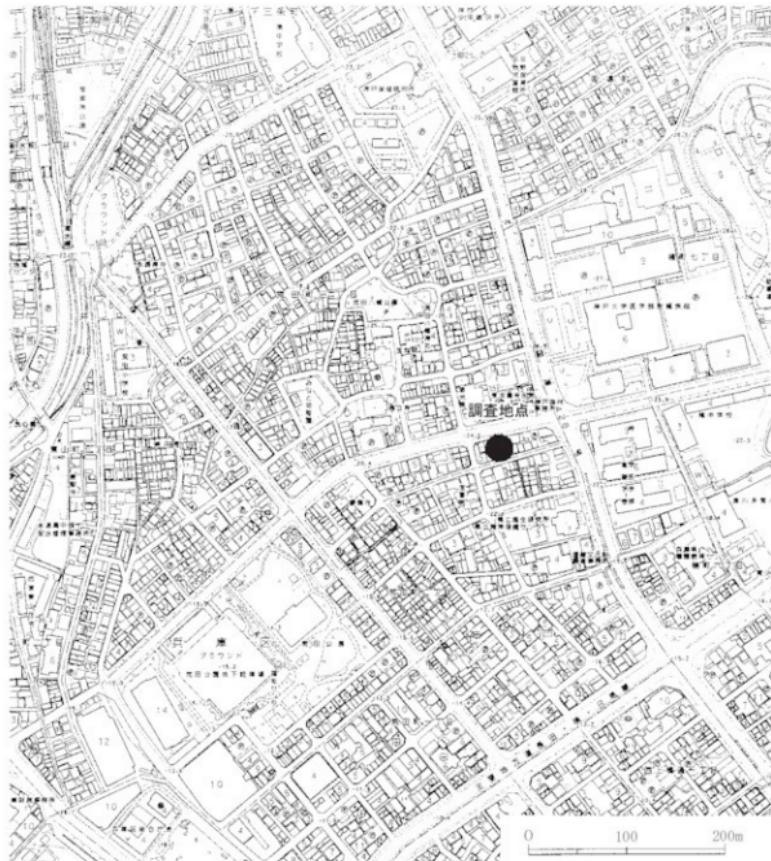
楠・荒田町遺跡は旧湊川の左岸段丘面上に立地する遺跡である。遺跡の南側の境界は緩斜面地となっていて判然としないが、西側は旧湊川の流路跡、北側はかつて存在していた五郎池・十郎池跡の谷地形、東側は大倉山の丘陵で区切られる範囲に遺跡が存在している。遺跡範囲内で最も標高が高い場所は神戸大学医学部付属病院の北側で標高約 28m、調査地点ではそれより低く標高約 24m である。

遺跡は昭和 52 年 12 月に神戸市営地下鉄の建設に伴う事前の市電軌道撤去・埋設管試掘調査に並行して実施された立会調査によって始めて確認された。その翌年に第 1 次調査が実施された後、神戸大学医学部構内での兵庫県教育委員会による調査も含め、今まで多くの調査が実施されてきた。その結果縄文時代から中世まで続く大規模複合遺跡であることが確認されている。中でも特筆すべき内容は弥生時代前記～中期の集落と、平安時代末～鎌倉時代の遺構群である。前者は堅穴建物・掘立柱建物・貯蔵穴・集落を限る溝等が確認され、後者は掘立柱建物・大規模な壕・溝等が確認されている。平安時代末の時期はまさに平氏が当地一帯で権勢を振っていた時代に一致するが、鎌倉時代の遺構はいわゆる平氏没官領として福原の地が接收された後も何らかの活発な活動があったことを示す資料であろう。

今回当該地で共同住宅の建設が計画され、6 月 20 日に試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財が確認された。当該工事を施工するに当たり、埋蔵文化財に影響を与えることが明らかとなつたため、工事影響範囲に関して発掘調査を実施する運びとなった。調査にあたっては掘削土



第1図 楠・荒田町遺跡位置図



第2図 調査地点周辺の現地形図（1 : 5,000）

の仮置き場と掘削土を搬出する際のトラックヤードを確保する関係から、東西2分割してまず西側から中央部分を先行して実施し、後に反転して東側を実施した。現地での調査期間は平成24年9月27日～11月30日である。

第2節 調査組織

発掘調査及び遺物整理、報告書刊行は神戸市文化財保護審議会の指導の下、以下の組織で実施された。

神戸市文化財保護審議委員（史跡・考古担当）

工楽 善通（大阪府立狭山池博物館館長）

和田 晴吾（立命館大学名誉教授）（平成 25 年 7 月 14 日まで）

菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）（平成 25 年 7 月 15 日から）

神戸市教育委員会事務局

教育長

永井 秀憲（平成 24 年度）・

雪村 新之助（平成 25 年度）

社会教育部長

東野 展也

文化財担当部長（文化財課長事務取扱）

安達 宏二

埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）

千種 浩

文化財専門役

丸山 潔

文化財課担当係長

丹治 康明・安田 澄（平成 24 年度）・

前田 佳久（平成 25 年度）

埋蔵文化財センター担当係長

斎木 嶽

事務担当学芸員

井尻 格・中谷 正・佐伯 二郎（平成

24 年度）・小林 さやか（平成 24 年度）

西岡 誠司（平成 25 年度）

遺物整理担当学芸員

藤井 太郎

保存処理担当学芸員

中村 大介

現地調査・報告書作成担当学芸員

関野 豊



第3図 調査地点位置図（1 : 2,500）

第2章 遺跡の歴史的環境と立地

第1節 楠・荒田町遺跡と周辺の遺跡

旧石器時代 発掘調査によって出土遺物として発見された例ではないが、会下山遺跡でサヌカイト製の国府型ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代 いわゆる縄文海進期のピークを迎える約7,000年前の海岸線は、JR元町駅付近から花隈あたりを経て、神戸駅北側の湊川神社付近より上沢通あたりを通っていたようである。宇治川南遺跡では早期～晚期にかけての土器が出土し、石棒・土偶なども出土している。それらの中には東北地方の土器型式のものや、九州産の黒曜石などが出土しており、古くから他地域との交流がうかがえる。北側山麓の祇園遺跡でも早期・前期の遺物が出土している。また低地の遺跡では大開遺跡や上沢遺跡、五番町遺跡などが挙げられる。

楠・荒田町遺跡では第6次調査で後期の土坑が検出された。第16次調査では後期以降の土坑と貯蔵穴が検出されたほか、中期～後期の土器が出土し、人々の生活の痕跡が確認された。第19次調査では当遺跡では最古と考えられる縄文時代早期以前のサヌカイト製柳葉形尖頭器が出土している。

弥生時代 当該地周辺の遺跡の数は、この時代になると急激に増加している。宇治川南遺跡・大開遺跡では前期の竪穴建物が検出されたほか、大開遺跡では集落の環濠も確認されている。中期では宇治川南遺跡で木棺墓群が確認されている。後期には祇園遺跡・長田神社境内遺跡・上沢遺跡に集落が営まれる。また中・後期には山麓緩斜面地では祇園遺跡が、丘陵上では高地性集落として会下山遺跡・天王谷遺跡・祇園神社裏山遺跡などが営まれるようになる。

楠・荒田町遺跡では前期から後期に至るまで集落が営まれていた。第1・5・6次調査で前期末～中期初頭の約40基の貯蔵穴をはじめ、中期前半～中頃の竪穴建物や掘立柱建物、中期後半の方形周溝墓や木棺墓が検出され、前期～中期の集落内での土地利用の内訳が判明した。また第16次調査では中期の大型棟持柱を持つ掘立柱建物や壺棺、集落を限る溝など集落の姿を復元できる資料が得られた。当遺跡が拠点集落として安定して営まれ続けていたことが明らかとなり、出土した土器は前期～中期の当地域の基準資料となっている。

古墳時代 六甲山系南麓は市街化が早くに進行したため、かつて存在していた小規模な古墳は削平されて消滅したものが多いと考えられている。夢野丸山古墳・会下山二本松古墳・念佛山古墳などが知られているにすぎない。夢野丸山古墳では扁平な板石積の竪穴式石室が確認され、重列式神獣鏡などが出土している。集落遺跡としては上沢遺跡・御蔵遺跡・御船遺跡・神楽遺跡・三番町遺跡・生田遺跡などが知られる。上沢遺跡からは遺物包含層からではあるが後期の滑石製模造品・滑石製玉類が多数出土し、水辺の祭祀に使用された可能性がある。

楠・荒田町遺跡では第12次調査で古墳時代前期の集落の存在を窺がわせる土坑やピットが検出された。第1次調査でも6世紀前葉の竪穴建物が確認されてはいたが、第30次調査で古墳時代後期の竪穴建物と掘立柱建物が確認されている。建物が確認された場所は遺跡内の中央であることから、集落の中心が弥生時代に比べて北に移っている様相が窺がえる。

飛鳥時代 下山手北遺跡では7世紀前半の倉庫を含む掘立柱建物群が検出されている。

楠・荒田町遺跡ではこの時期の遺構・遺物はほとんど確認されていない。

奈良時代 新湊川と妙法寺川との合流点東方の室内遺跡では、明確な遺構は確認されていないが奈良時代～平安時代前半と考えられる軒丸瓦・軒平瓦・塑像製の仏像台座が出土しており、

至近地に寺院が存在していた可能性がある。他には銅鉢が出土した上沢遺跡、8世紀末～9世紀の倉庫を含む掘立柱建物が検出された八部郡衙の候補地である御蔵遺跡・神楽遺跡・御船遺跡などがある。兵庫津遺跡では大輪田泊の時代に遡る遺物が出土しており、今後の調査に期待されている。

楠・荒田町遺跡では神戸大学医学部附属病院構内で多くの土器が出土した土坑が検出されているが、それ以外では土器が散見されるにすぎない。

平安時代 下山手北遺跡では園池や建物の地鎮祭祀を行った遺構が確認されており、都の貴族の別邸であった可能性が窺われる。宇治川南遺跡では10世紀末から13世紀前半の遺物が出土し、神楽遺跡では平安時代中期の縁釉陶器・灰釉陶器などの遺物が出土している。

楠・荒田町遺跡ではこの時代も良好な遺構・遺物はあまり確認されていない。

平安時代末 当該地周辺の遺跡で飛鳥時代以降一旦確認例が減少していた遺構・遺物の数は、この頃以降増加する。「平野」という地名が残る場所に所在する紙闌遺跡では庭園の園池遺構が確認され、大量の京都系土師器、播磨系軒瓦に交じって山城系軒瓦が出土している。園池の造りはとても精緻で、京都の同時期の園池と比較しても遜色のないものである。園池の時期は出土した大量の土師器の土器型式から、およそ2型式程度の時期幅に収まるもので、非常に短期間のうちに何度も補修・改修が行われていたことが想定される。時期的には平清盛が福原を「遁世退老之幽居」としていた時期と一致する。また出土遺物の中には輸入陶磁器などもあり、これら的内容からこの地は平氏の中でもかなり身分の高い人物の別邸であった可能性が強い。なお園池遺構の洲浜の堤がN52°Eの東西方向で、紙闌遺跡周辺部の現状の地割りに近い方位となっている。これとは別に同時代と考えられる石垣等が検出されており、この石垣はN37°Wの南北方向をとるものである。また日本では博多・京都・鎌倉にのみ数点の出土例があり、中国江西省の吉州窯で焼かれた玳瑁天目小碗が出土している。また出土した多くの土師器は12世紀後半の土器資料として指標となる。当時の有力者が当地域に存在したことを裏付ける。

楠・荒田町遺跡では昭和56(1982)年に神戸大学付属病院内の病棟の増改築工事に伴う調査が、神戸大学調査団により第2次調査として実施された。最下層の縄文及び弥生時代の遺物包含層の上面で、平安時代末期の遺物とともに掘立柱建物の一部と、大規模な二重の堀が確認された。平氏による福原遷都と同時期の遺構がはじめて埋蔵文化財の発掘調査で明らかとなつた。また第2次調査で確認された2重の堀の延長部分を検出してお、堀の断面形状の違いから屋敷地を区画する堀と都市を区画する箱堀の2種類の境界及び防禦の堀であることが指摘されている。これらの遺構も強い真北への意識は認められず、周囲全体の地割と比較しても特異な方向ではない。おそらくは地形に合わせて開発された区画によって規定された建物の方位と考えられ、方位を大きく改変して建物を建てるることはなかったと考えられる。つまりは周囲の自然の地形的制約の中で開発によるものであり、真北を意識した大規模な開発については実際に着工された実例が現在は確認されていない。

鎌倉時代 源平合戦以降の遺跡の分布は当地から西に偏る傾向があり、集落では長田神社境内遺跡・二葉町遺跡がある。二葉町遺跡は再開発で広範囲に調査が行われ、集落の様相がほぼ復元できる成果がある。二葉町遺跡の集落は11世紀中頃～13世紀中頃まで営まれるが、12世紀後半以降に拡大し、13世紀にはピークを迎える。ひとつの建物群の中には規模の異なるものがあり、住居とは別の用途の建物を含む複数の建物群で生活の単位が構成されている。長田神社境内遺跡では12世紀後半の土坑から当時の使用土器のセットと考えられるものが出土した他、谷状の遺構から祭祀関係の遺物が出土している。御蔵遺跡では木棺墓群も確認されている。

上沢遺跡では13世紀前半の土師器が墓に副葬されていた。耕作溝に関しては、二葉町遺跡では周囲の現在の地割り方向にはほぼ沿うものである。御蔵遺跡や松野遺跡でもそれぞれ周囲の現在の地割り方向に一致する状況が多く確認されている。また大橋町遺跡では、飛鳥時代では周囲の現在の地割り方向と異なっていたものが、平安時代後期より少し前から現在の地割り方向に沿う方向へと変化している。さらに二葉町遺跡の久保町六丁目での調査で確認された建物群はこの耕作溝を切って柱穴が掘られており、耕作溝より後出するものである。ただし建物の方向は耕作溝の方向に沿っていた。耕作溝の多くが12世紀以降と考えられ、12世紀前半にはすでに現在の地割り方向に一致するように変化する場所が存在し始めていたと考えられる。このことから範囲は断片的であったとしても、12世紀中ごろには八部郡内で広範囲に条里方向への敷地の一貫が意識されていたと考えられる。また西摂西部地域における土器の様相としては、京都系土師器とともに回転糸切り底部の在地系土師器が混在する傾向がある。ただ在地系の土器は含まれるとしても比率はわずかである。祇園遺跡・雪御所遺跡・楠・荒田町遺跡の周辺は、土師器の様相として京都色が強い特異な状況を示す地域と考えられる。

楠・荒田町遺跡では第10・11次調査で壕状遺構が確認されている。この壕状遺構は幅約5m、深さ1.7m、断面はV字状で、時期としては12世紀から13世紀と考えられる。この遺構の方位は明治19年作成の暇製地形図に見られる地割り方向に近い方位をとり、祇園遺跡の庭園の洲浜の方向とほぼ一致する。また第12次調査では溝が一条確認されている。この溝は2段に掘り込まれ、幅5m以上、深さ1.4m以上である。溝幅は推定で10m近いものであり、時期としては12世紀後半～13世紀と考えられている。溝の方位は第10・11次調査の壕状遺構とほぼ一致している。第16次調査では、柵によって区画された掘立柱建物群10棟が確認されている。これらの建物の内、SB09とSB10が13世紀代と推定されている。

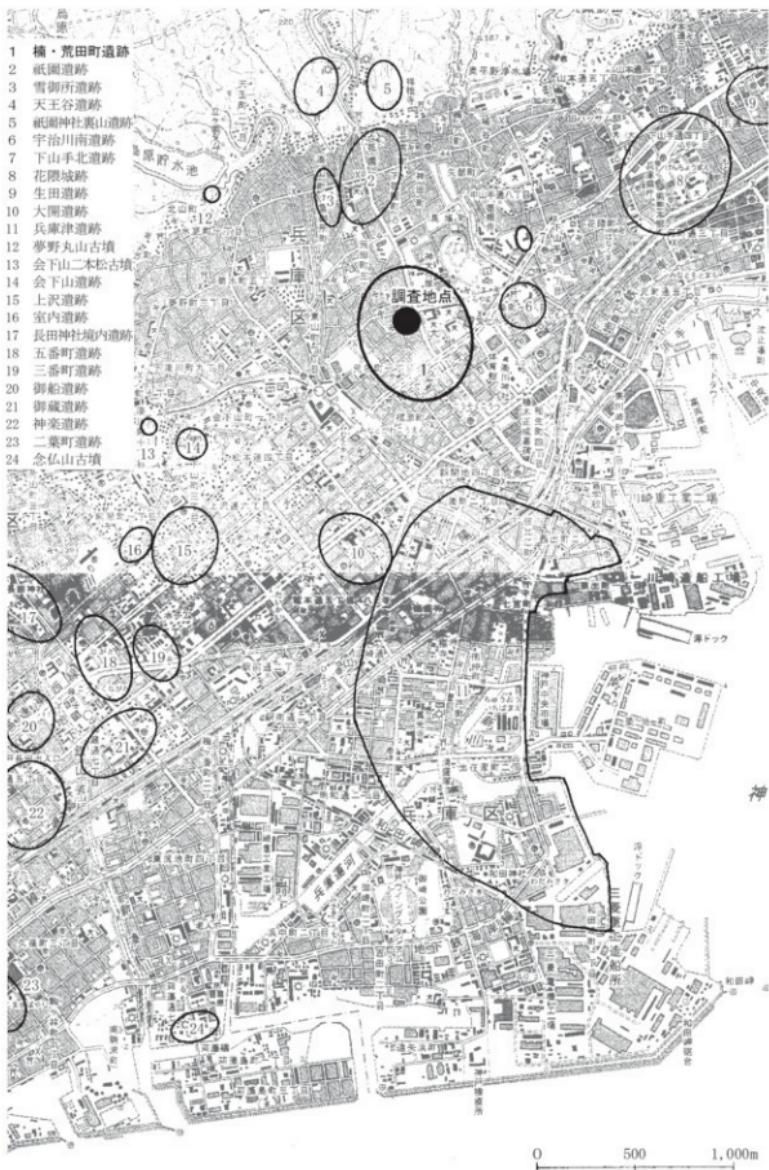
南北朝時代 当地域は楠木正成の最期となる湊川の戦いの舞台となっている。しかしそれに関する遺構・遺物は現在発見されていない。ゲリラ戦を得意とした楠木正成が旧湊川以前に形成された湿地帯を合戦の場所に選んだ可能性がある。

室町時代 兵庫津遺跡は平清盛が修築した大輪田泊に関連する遺構の確認が期待される遺跡であるが、現在では尚に関係する当時の確実な物証は確認されず、主に室町時代以降の遺構・遺物が確認されている。『兵庫北関入船納帳』でも当時の繁栄ぶりの記載があり、港町として大変脈わっていたようである。

戦国時代 港湾都市として繁栄していた当地域は各勢力が奪い合うこととなった。戦国末期には東方約1.5kmに花隈城が築かれ、海と内陸部をつなぐ拠点として重要な地域となった。ただし文献史料に記載されたり絵図に描かれたりする花隈城についても、実態のわかる遺構・遺物はわずかしか出土していない。

江戸時代 戦国時代に織田信長の命により、池田恒興・信輝父子が花隈城を移築し、兵庫津の中心となる兵庫城が築城された。その後は江戸時代を通して政庁として兵庫城跡が使用され、兵庫県庁が置かれるまで機能し続けた。近年の調査では兵庫勤番所の石垣の一部が確認されている。兵庫津は商人の町として繁榮し、幾度かの大火にも見舞われた焼土層や町家の跡が発掘調査で確認されており、絵図や文献資料と対比できる資料が発掘調査で得られている。

楠・荒田町遺跡は平成15(2003)年の調査で東西2間(3.6m)、南西1間(2.7m)の櫓と想定される建物が検出されている。



第4図 周辺の主な遺跡 (1 : 25,000)

第2節 遺跡と地理的環境

他の遺跡の範囲よりも楠・荒田町遺跡の範囲は比較的広い。このことは遺跡が立地する段丘の範囲が比較的広いこと、段丘外側の低地との標高差が大きく見通しが良いこと、遺跡の時代が縄文時代～中世に及び、長きにわたって当時の人々がこの地で居住し、生活を続けていたことによると考えられる。遺跡の範囲と概ね重なっている段丘の範囲は、南側は沖積作用によって緩斜面地となっているため判然としないが、残る三方の端は西側が旧湊川の流路、北側がかつて存在した五郎池・十郎池跡の谷地形、東側が大倉山丘陵である。

この範囲の中でも東側の大倉山丘陵に接した場所から遺跡の中央あたりについては、明治時代に作成された地図を見ても地割の方向が周囲と一致しない。また周囲よりも小高く描かれている。その小高さが平安時代末に平氏が福原の都の造営に着手した場所である可能性が高く、また実際に過去の調査事例でも平氏関連の重要な遺構が数多く確認されている範囲でもある。

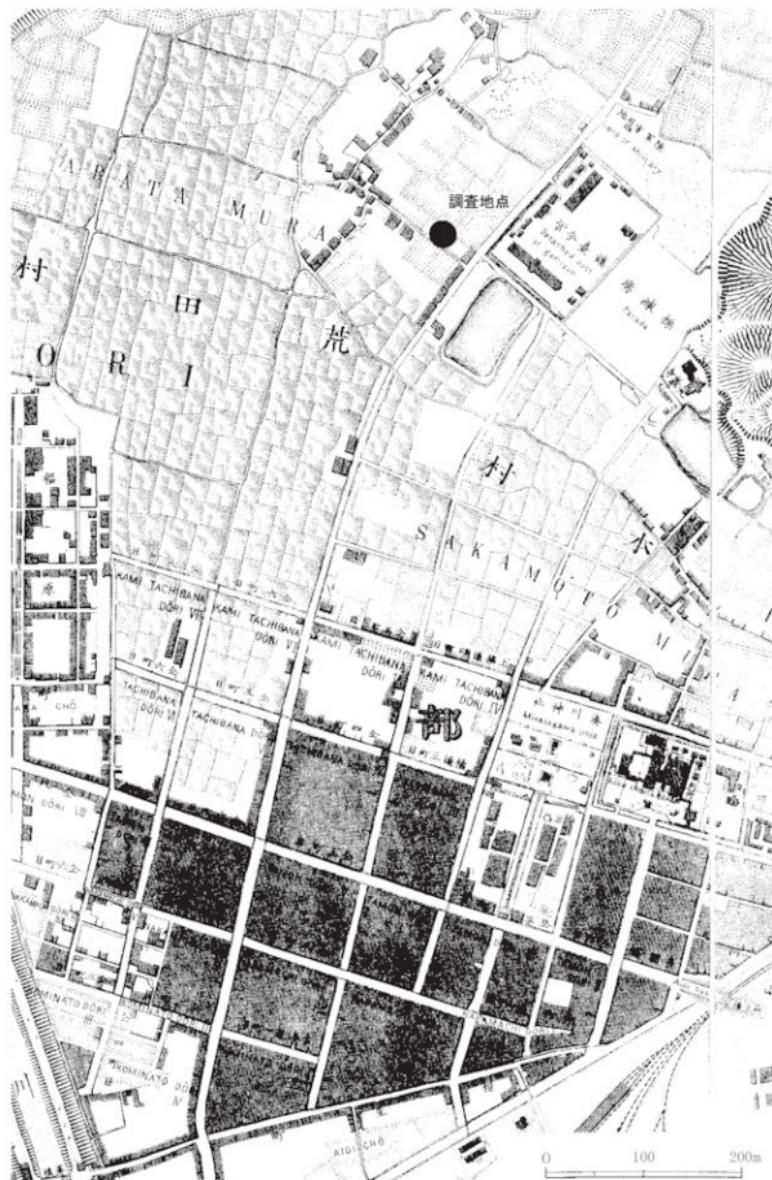
現況の遺跡内の街区を東西方向に歩けば良く判るが、約 50 cm から数 m 程度の地面の段差が何ヶ所も視認され、しかもこの段差は遺跡内を何度もカーブしながら続いていることが確認される。遺跡の範囲と同様に南側では一部判然としない所もあるが、大倉山丘陵の南辺から派生したこの段差は東へ進み、宇治川の手前で屈曲して南へ折れる。そして湊川神社と中央体育館の間を通過し、主要地方道神戸三田線の東側を通り、楠町六丁目の交差点辺りを通過する。その後街区の中を通って福原柳筋の東側を並行に北へ進み、みなと幼稚園の東隣・佛立寺・宝地院の西隣を通過し、荒田八幡宮の北側で五郎池・十郎池跡の谷地形の南岸に至っている。大倉山丘陵の北側で少し遺跡の範囲から越えてしまうが、すぐに宇治川へ向かう斜面地形となるために大倉山丘陵に帰着する。大倉山丘陵南側も楠・荒田町遺跡の範囲から越えているが、その部分は宇治川南遺跡に含まれていたり、中央体育館や神戸文化ホールとその隣の公園のために遺跡の存否が不明であったりするため、楠・荒田町遺跡の範囲外であっても特に問題視するものではないであろう。通産業省工業技術院地質調査所の刊行による地域地質研究報告『神戸地域の地質』収録の 5 万分の 1 地質図によると、上記の範囲を中位段丘とし、その周囲を取り巻く部分は低位段丘に相当すると図化されている。2 つの段丘面の標高差が遺跡の遺構・遺物の内容にどのような差をもたらしているのかどうかは、少し留意する必要がある。

実際には遺跡内でのこれまでの調査件数や調査面積が、中位段丘面の方が低位段丘面内よりも多い。このため遺跡の内容が中位段丘面内での調査成果に大きく影響されているのが現状である。そうであっても低位段丘面上の方に弥生時代の遺構が多く、中位段丘面上の方に古墳時代と平安時代末～鎌倉時代の遺構が多く分布する傾向はうかがえる。弥生時代の段階では中位段丘面～大倉山丘陵部については里山的な利用の場として扱われ、居住域ではなかった可能性も考えられる。また平安時代末～鎌倉時代に関しては、比較的高所で眺望の良い位置を平安時代に平氏一門が占拠し、条坊を備えた都の姿としては完成しなかったが、福原京の中心として安徳天皇の内裏や八省院といった官庁を営もうとし、また平氏に従って平安京から福原に移ってきた貴族への宅地の分配も始まっていたようである。平氏滅亡後に平家没官領となつたが、小高く居住に適した場所として、鎌倉時代以降も当時の人々の活動の痕跡が遺構・遺物として確認されるのであろう。遺跡の最高所は大学病院の北隣の民有地で、大学病院内で確認されている平氏関連の遺構が続いている可能性が高く、将来の発掘調査の機会に注視したい。

平氏の関連遺跡は楠・荒田町遺跡だけではない。当該地北側の山麓には紙園遺跡と雪御所遺跡が存在するし、南側には大輪田の泊でもあった兵庫津遺跡が存在している。兵庫津遺跡では

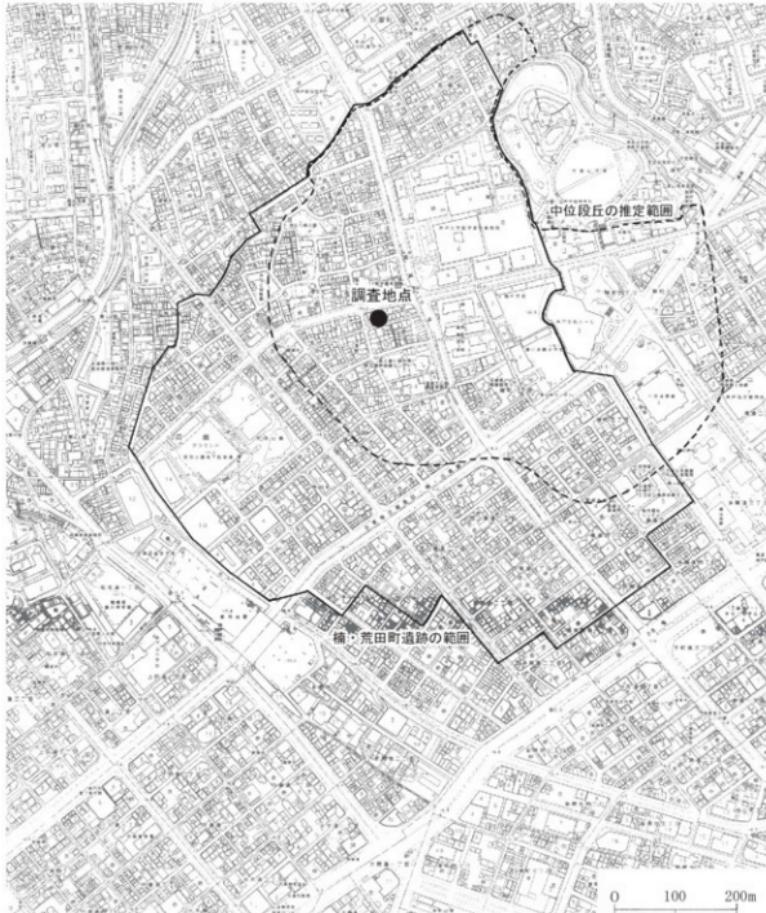


第5図 明治18年頃の周辺の地形図（1:10,000）



第6図 明治14年頃の周辺の地形図（1:5,000）

平安時代末の遺構・遺物は未確認であるが、祇園遺跡と雪御所遺跡は過去の調査で平氏と関連が深いと判断される遺構や遺物が確認されている。これらと楠・荒田町遺跡の4遺跡の関係や内容の差など、解明すべき課題が多い。また祇園遺跡と雪御所遺跡では、遺跡北側の山麓に近づくほど、当時の規模が余程大きく深い遺構でなければ既に削平されて消滅してしまっている可能性が高い。あくまでも文献資料による復元案であるが、平清盛邸の位置は雪御所遺跡の範囲よりもう少し山麓側にあったとされている。今後雪御所遺跡は現在より北方へ拡がる可能性はあるが、現在は旧地形の改変が著しく、平清盛邸は削平や地形の改変のために遺存状況が極めて悪い可能性が高い。

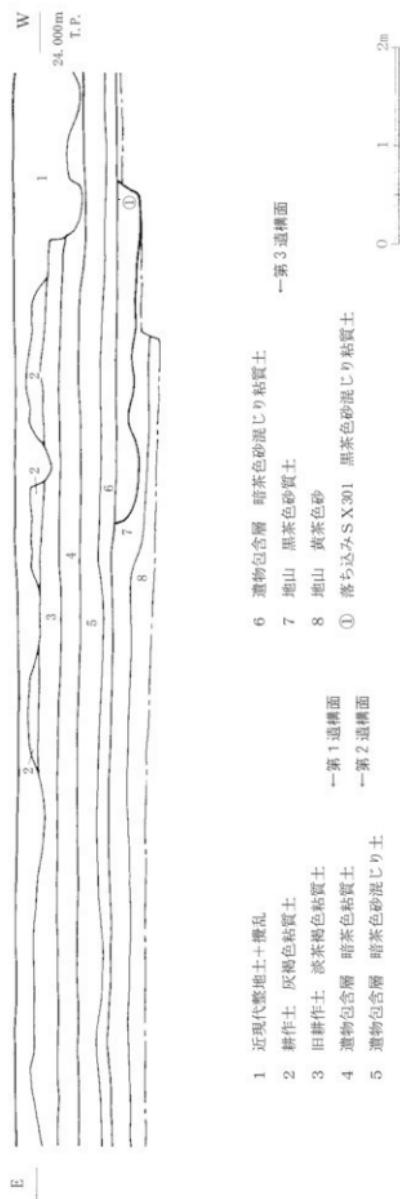


第7図 楠・荒田町遺跡の範囲と推定中位段丘面の範囲（1：8,000）

第3章 調査成果

第1節 基本層序

基本的な層序は近現代の整地土の下は宅地化直前の耕作土（灰褐色粘質土）、旧耕作土（淡茶褐色粘質土）、遺物包含層が3層（暗茶色粘質土・暗茶色砂混じり土・暗茶色砂混じり粘質土）、地山（調査区東半は黒茶色粘質土・西半は茶褐色粘質土）と続く。調査の最終で調査区東半の黒茶色粘質土を一部掘り抜いて遺構・遺物の有無を確認したが何も確認されなかった。敷地の旧状は駐車場であり、概ね水平であったが、各遺構面は周辺の地形に応じ、調査区南端が北端より約10～20cm低い状況で検出された。遺物包含層の暗茶色砂混じり粘質土も南壁では確認されているが、敷地中央で東西2ヶ所に設けられた試掘調査のテストピットの壁面では確認されなかつた。第1遺構面は遺物包含層の暗茶色粘質土の上面、第2遺構面は遺物包含層の暗茶色砂混じり土の上面、第3遺構面は地山の黒茶色～茶褐色粘質土の上面であるが、本来の第2遺構面上では極めて遺構と遺構周囲の基盤層との識別が困難であったため、約10cm遺構面を削り込んで遺構を検出した。



第8図 南壁主要部土層図 (1:50)

第2節 第1遺構面

江戸時代頃の遺構面で、調査区中央でピット群を検出した他、散在的にピットを検出した。このピット群は柵状に並んでいるようにみえるものもあるが、ピットの間隔も揃っていない。大きさも直径約20~30cm、深さ約5~20cmと小規模で、柵であったとしても極めて規模の小さいものになる。ピットからはわずかな遺物しか出土せず、図化可能なものはなかった。

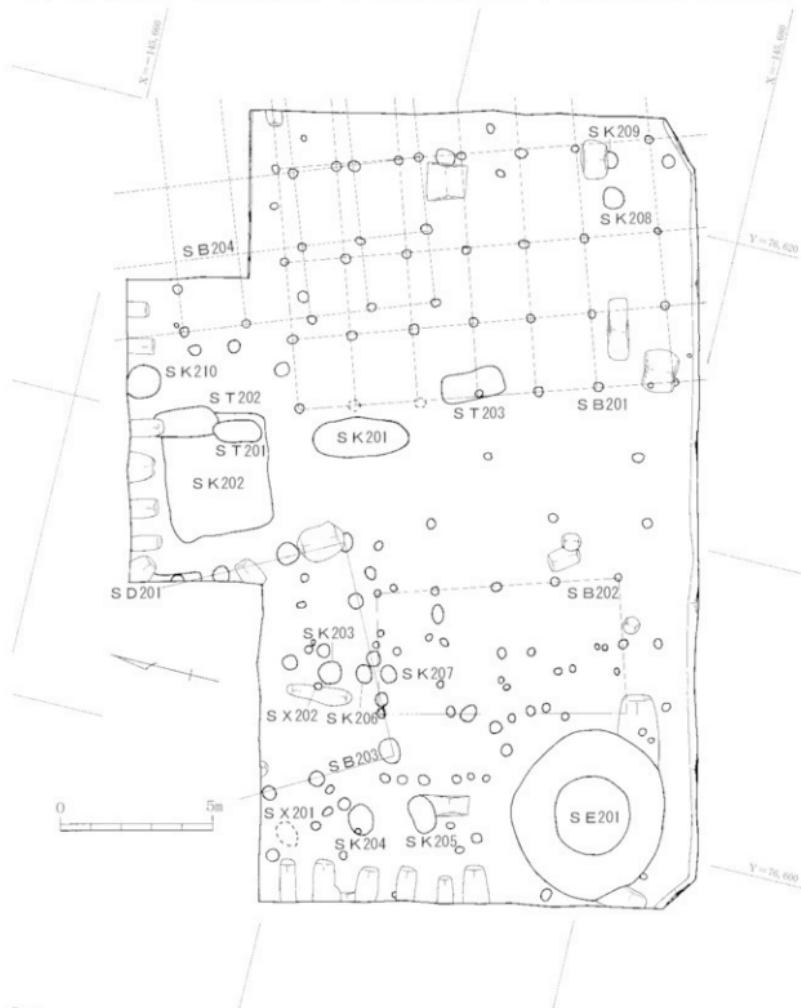


第9図 第1遺構面平面図 (1:160)

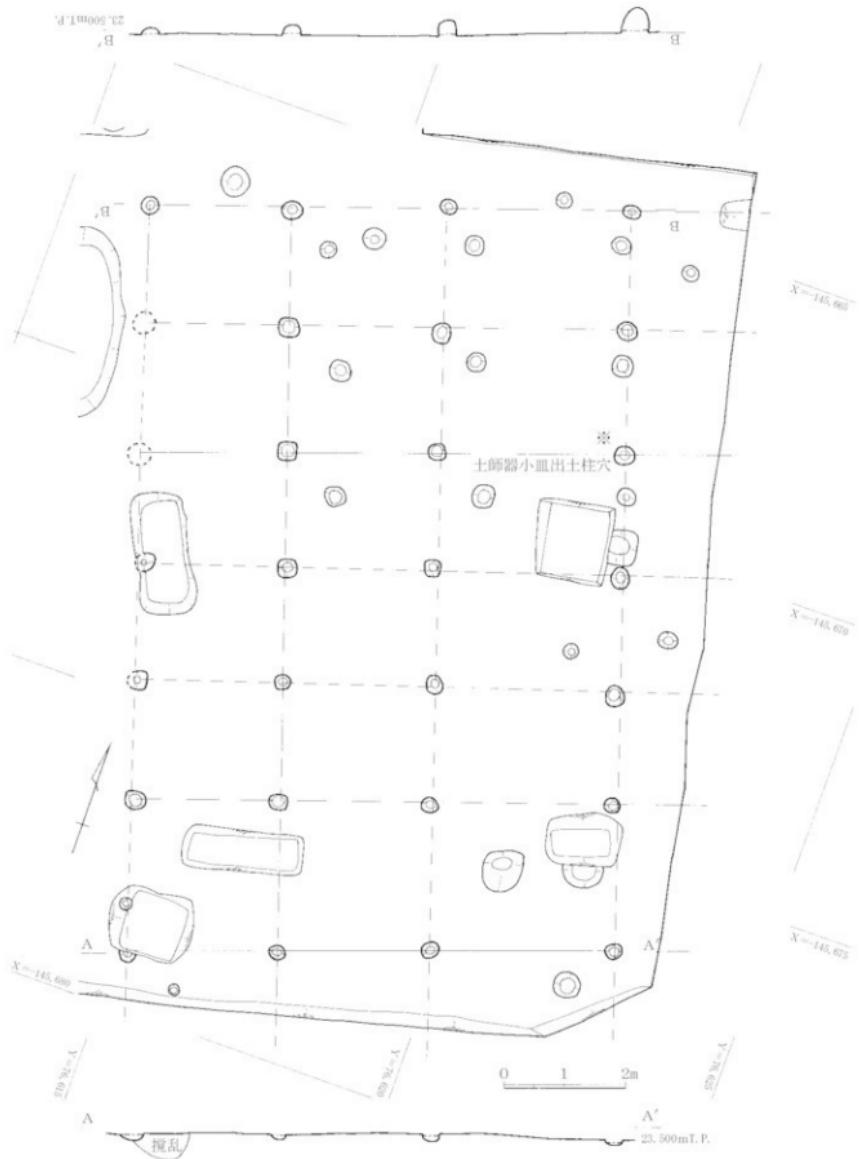
第3節 第2遺構面

平安時代から鎌倉時代の遺構面で、掘立柱建物4棟・溝1条・井戸1基・土坑10基・墓3基・集石遺構2基のほか、72基の多くのピットを検出した。

SB201 調査区の東側で検出した規模の大きな総柱の掘立柱建物である。南側と東側が調査区外に続いたため正確な規模や建物の棟の方向は不明であるが、現状で南北6間（12.3m）以



第10図 第2遺構面平面図 (1 : 160)



第11図 挖立柱建物S B201 平面図・断面図 (1 : 80)

上、東西3間（7.8m）以上である。柱間は南北方向が1.9~2.0mであるが、南端は2.4mと広くなる。東西方向が2.4mであるが、東端は2.9mと広くなる。柱間が変化する部分は掘立柱建物と掘立柱建物の間で、柱方向をそろえた別の掘立柱建物が並んで建っていた可能性も残っている。柱穴の直径は約0.4m、深さは約0.1~0.4mである。柱穴の埋土は暗灰茶色系の粘質土であったが、柱痕は判然とせず視認できなかった。柱穴の向きはN19°Wであった。各柱穴からはわずかな遺物しか出土せず、図化可能なものはほとんどなかったが、柱穴のひとつから京都系の土器小皿が1点出土した。

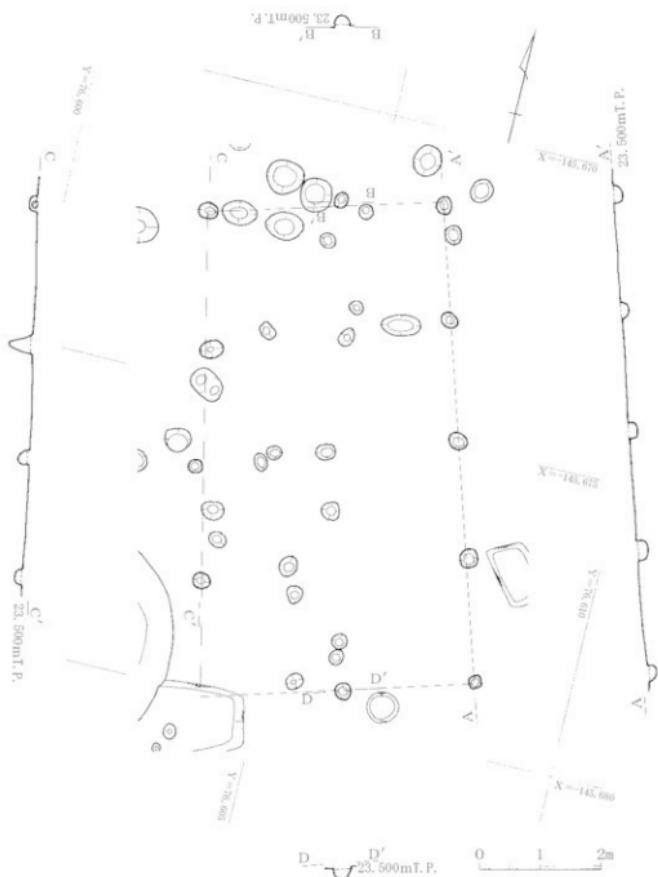
S B202 調査区の西側で検出した掘立柱建物である。桁行4間（7.9m）×梁間2間（3.9



第12図 掘立柱

建物S B201

出土遺物（1:4）



第13図 掘立柱建物S B202 平面図・断面図（1:80）



第14図 挖立柱建物SB203平面図・断面図(1:80)

m)、柱間は1.3~2.3mである。柱穴の直径は約0.3m、深さは約0.2~0.4mである。柱穴の埋土は暗灰茶色系の粘質土であったが、柱痕は判然とせず視認できなかった。柱穴の向きはN17°Wであった。各柱穴からはわずかな遺物しか出土せず、図化可能なものはなかった。

SB203 調査区の北西側で検出した掘形が大きな掘立柱建物である。北側が調査区外に続くため正確な規模や建物の棟の方向は不明であるが、現状で南北3間(5.7m)以上、東西4間(7.0m)である。柱間は南北方向が1.4~2.5m、東西方向が1.3~2.0mである。柱穴の直径は約0.4~0.9m、深さは約0.2~0.4mである。柱穴の埋土は暗灰茶色系の粘質土であったが、柱痕は判然とせず視認できなかった。建物の棟方向が判らないが、調査区内で完結している東西方向の柱穴の向きはN61°Eであった。各柱穴からはわずかな遺物しか出土せず、図化可能なものはなかったが、高台が小さくなり、暗文も退化した瓦器椀の破片が出土したため、建物の



第15図 挖立柱建物SB204平面図・断面図(1:80)

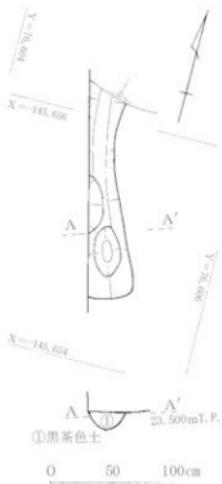
方位は他の3つの建物と大きく異なるが、建てられた時期の差はあまり大きくはないものと想定される。

SB204 調査区の北東側で検出した総柱の掘立柱建物である。北側と東側が調査区外に続いたため正確な規模や建物の棟の方向は不明であるが、現状で南北4間(8.3m)以上、東西2間(4.7m)以上である。柱間は南北方向が1.9~2.2m、東西方向が2.2~2.4mである。柱穴の直径は約0.3~0.4m、深さは約0.3~0.4mである。柱穴の埋土は暗灰茶色系の粘質土であったが、柱痕は判然とせず視認できなかった。建物の棟方向が判らないが、柱列が長い南北方向の柱穴の向きはN21°Wであった。各柱穴からはわずかな遺物しか出土せず、図化可能なものはなかった。

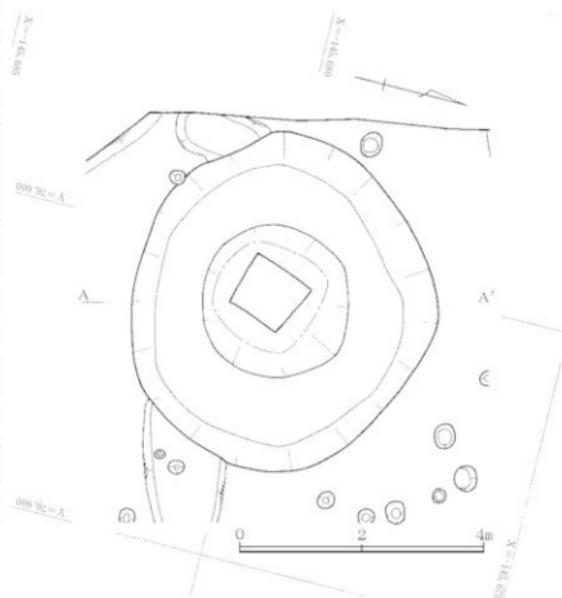
SD201 調査区北側突出部の西端で検出した小規模な溝である。北側が擾乱で破壊され、

西端が調査区外に続くため全長や幅は不明であるが、現状で長さ1.8m以上、幅0.3m以上、深さ10~20cmである。埋土は黒茶色土である。遺物は土師器小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

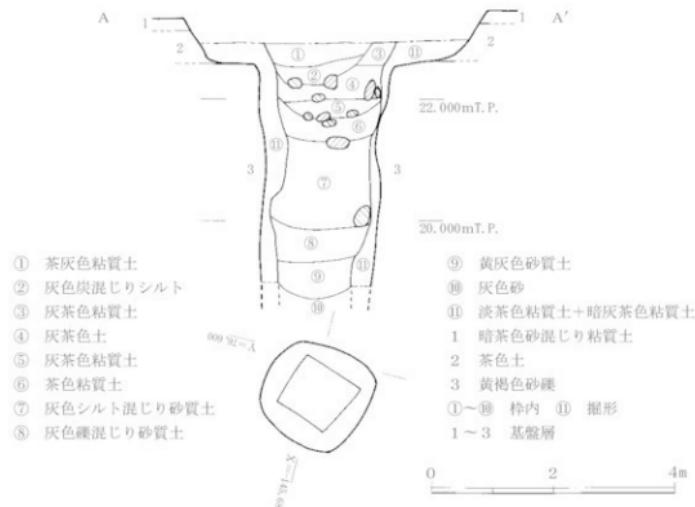
S E201 調査区の南西隅で検出した井戸である。検出面での掘形は長径5.6m、短径5.1mの大きな梢円形であるが、深さ0.7~0.9mのところで急に小さくなり、直径2.4mの規模となる。その深さ以下の周囲の地山が非常に堅密な黄褐色砂礫になり、井戸が掘削された際に掘削範囲を大きくする必要性がないと判断されたものと推測される。その部分からの深さ3.9m、検出面からの深さ4.6~4.8mまで調査で掘削したが、検出底面に1mのピンボルを突き刺してもまだ底に達しない状態であったため、安全性を考慮してそこまで掘り下げる中止した。掘形の形状は下部に向かって円形から徐々に変化し、検出底面では隅丸方形になっている。また当初検出面での井戸枠の痕跡は明瞭ではなかったが、約0.5m掘削した深さで井戸の中心に直径約2mの円形の範囲で土質や色調が明確に異なる部分を確認した。その範囲が井戸枠の痕跡と考えられるが、掘形との境界部分には完全に腐食したのか木質は全く遺存していないかった。その円形の範囲の形状も掘削して下部に向かうほど円形から徐々に変化していく。検出底面では少し歪んだ長方形になっていた。長方形の方向は長軸方向が約N20°Eで、今回検出した4棟の掘立柱建物とは方位の近似性は確認されなかつた。検出底面で井戸枠内部と掘形との境界部分には、腐食して消滅しかかつた木質のようなものがわずかに遺存していたため、井戸枠本体の木組み方法は確認できなかつたが、井戸枠本体の形状は方形であった可能性が高い。



第16図 溝S D201
平面図・断面図(1:40)

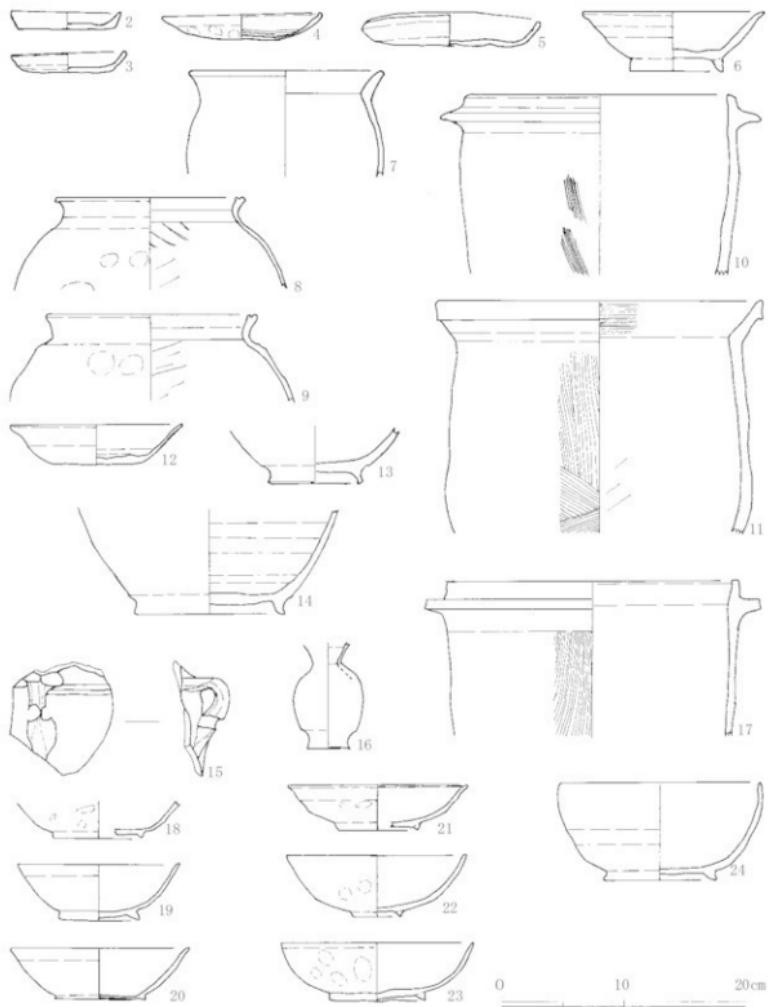


第17図 井戸S E201平面図(1:80)



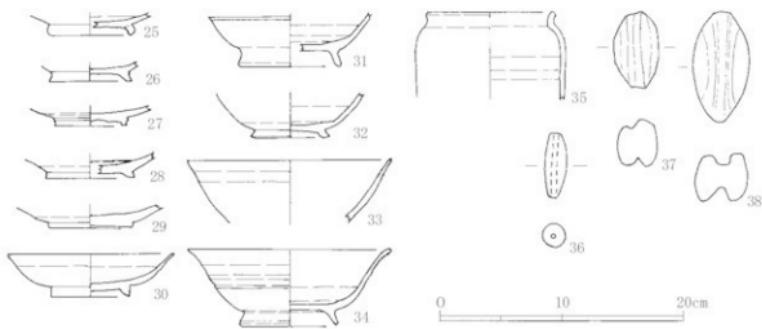
第18図 井戸SE201断面図 (1:80)

井戸底まで完掘できた訳ではないため、井戸が使われていた時点でのものではなく、あくまでも井戸が埋まっていく段階での遺物であるが、多くの遺物が出土した。2の底部はヘラ切り未調整の回転土師器小皿である。3は口縁部の二段ナデが強い京都系の土師器小皿である。4は内面見込にわずかにハケ目が観察される土師器皿である。5は歪みが極めて激しいが、二段ナデの土師器大皿である。6は断面三角の高台がつく杯で、内面の調整は少し荒いものの回転土師器碗である。7は口縁部が屈曲する土師器甕で、使用によるためかくすんで灰色味がかり、瓦質のようになっている。口縁部から外面は特にナデ調整は丁寧で、内面にわずかにケズリ痕跡がみられるのみである。8・9は土師器甕で、内面はケズリ、外面は指頭圧痕が顕著である。口縁端部を広く作り、その上面に1条沈線が施文されている。10は長胴化が進行した土師器羽釜で、これもナデ調整が丁寧である。外面にわずかにハケが残るのみである。11は長胴化が進行した土師器甕で、口縁部の屈曲は小さく、端部は三角形にまとめている。調整は全体内面がケズリ後丁寧なナデ、外面がハケ、口縁部内面がハケ後ナデである。12は須恵器杯で、回転ナデが内外面ともに強く施されている。13・14は貼り付け高台の須恵器壺である。底部周辺の破片のため全体の形状は不明である。15はやや大型の双耳壺の耳である。耳の横には断面三角形の貼り付け突帯がある。形状の退化が進んでいないため、やや古い様相の壺である。16は須恵器小壺で、外面最下部は強くナデられている。17は須恵器もしくは瓦質土器の長胴化が進行した羽釜である。外面調整はハケであるが、鐸の直下から上と内面は丁寧にナデされている。18～23は黒色土器椀、24は同じく鉢である。内面の調整は極めて丁寧ではあるが暗文は粗雑で、19・20・23には施されない。20は炭素の吸着が悪かったのか二次焼成を受けたのかほとんど黒色化していない。19～21は外面口縁部直下に強いナデを施すが、22には施されていない。18には外面の指頭圧痕が顕著ではなく、23は外面口縁部直下に極めて細い沈線を1条施してい



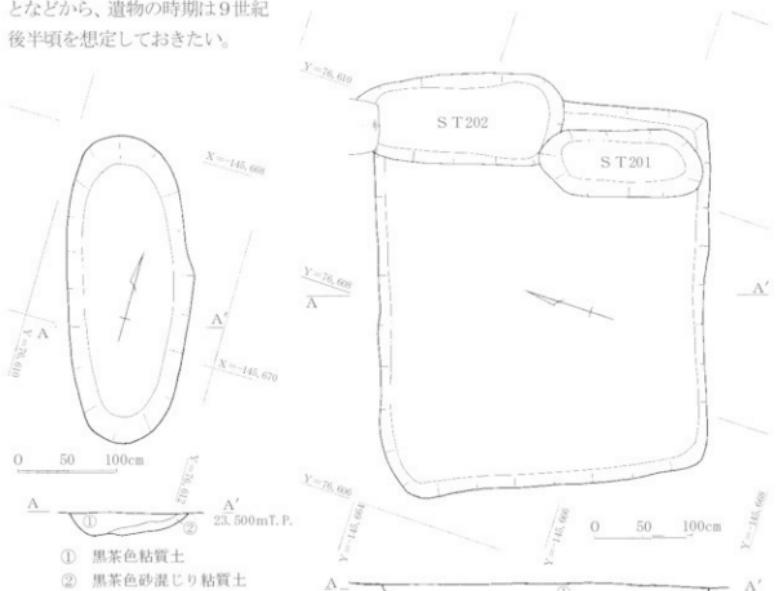
第19図 井戸SE201出土遺物1(1:4)

る。24は口縁がわずかに内傾する。18~24の高台はすべて貼り付け高台である。25は灰釉陶器皿、26~30は緑釉陶器皿であるが、高台近くまでしか残っていない個体もあるため、椀であった可能性が残る個体もある。25は貼り付け高台であるが、他はすべて削り出し高台である。31~34は緑釉陶器椀である。31・34は外面中ほどに沈線を1条施している。明確な接合跡は確認できなかったが、他より高い高台周囲を丁寧にナデており、貼り付け高台であったと推定さ



第20図 井戸SE201出土遺物2 (1:4)

れる。32は削り出し高台である。35はほとんど縁軸が剥げ落ちている。器形からは火舎の可能性があるが、火舎にしては復元口径が小さいために機種の特定が難しい。ただ非常に精良な胎土を使用し、極めて丁寧なナデで整形している。36は管状土錘、37・38は有溝土錘である。37の片面は摩滅が著しい。他にも棒状有孔土錘も出土しているが、小破片のため図化しなかつた。他には後述する68の鉄釘が1点出土した。図化しなかつた土師器皿に明確な「て」の字状口縁にはまだなりきっていない口縁部を持つものが含まれ、また両黒の黑色土器は出土していないことなどから、遺物の時期は9世紀後半頃を想定しておきたい。



第21図 土坑SK201

平面図・断面図 (1:50)

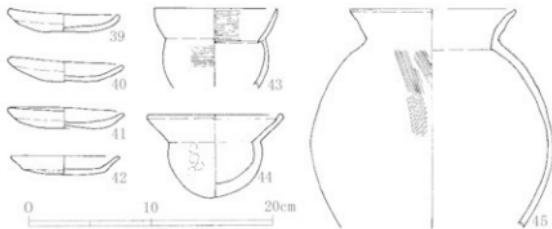


第22図 土坑SK202平面図・断面図 (1:50)

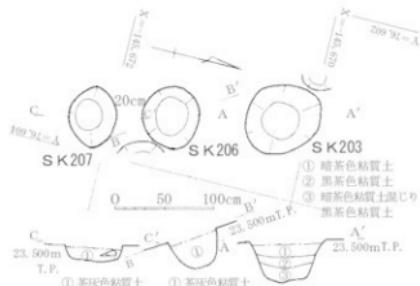
SK201 調査区の中央で検出した長楕円形の土坑である。長径3.2m、短径1.3m、深さ約50cmで、埋土は上が黒茶色粘質土、下が黒茶色砂混じり粘質土である。遺物は土師器・須恵器・瓦器の小片と土錘が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK202 調査区の北側突出部で検出した台形の土坑である。長さ3.6~4.2m、幅3.4m、深さ30~50cmで、埋土は黒茶色粘質土である。土師器・須恵器・黑色土器・白磁が出土したが、図化できたものは7点で、他は小片で図化可能なものはなかった。39~41は京都系の土師器小皿である。いずれも歪みが激しいが、外面口縁部を1段ナデている。42は瓦器小皿である。外面口縁部を強くナデ、外面底部は指頭圧痕が顕著である。内面には暗文がみられない。43・44は小型丸底壺である。43は内面口縁部と外面体部にハケを施した後、丁寧にナデしている。口縁部と体部との境界が内側に突出するよう接合されている。44は43と比較して手捏ね感が強く、外面体部に指頭圧痕が残る。45は土師器壺である。形状から遺構より古いものの可能性があるが、43・44同様に混入した遺物であろう。土坑の時期は基ST201・202との切合関係から12世紀頃を想定しておきたい。また図化はしなかつたが、土坑北西部で原面を多く残すサスカイト133が出土した。長さ約15cm、幅約10cm、厚さ約4cmであるが、原面が多く明確な剥片を剥ぎ取った痕跡がないことから弥生時代のものではなく、瀬戸内を航行する船のバラスト材として使用されていた可能性が高く、兵庫津から何らかのきっかけで持ち込まれたと考えられる。

SK203 調査区の北半西側で検出した円形の土坑である。長径0.8m、短径

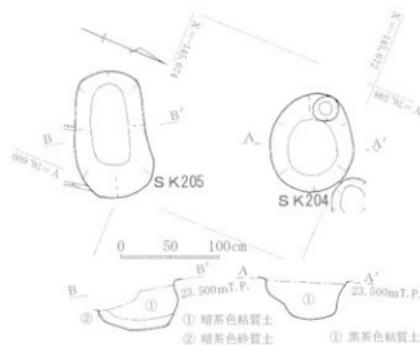


第23図 土坑SK202出土遺物(1:4)



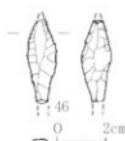
第24図 土坑SK203・206・207

平面図・断面図(1:50)



第25図 土坑SK204・205

平面図・断面図(1:50)



第26図
土坑SK206
出土遺物
(1 : 2)

0.7m、深さ約45cmで、埋土は上から順に暗茶色粘質土、黒茶色粘質土、暗茶色粘質土が混和した黒茶色粘質土である。土師器・須恵器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK204 調査区の西半北側で検出した円形の土坑である。長径1.0m、短径0.9m、深さ約40cmで、埋土は黒茶色粘質土である。土師器・須恵器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK205 調査区の西側中央で検出した長円形の土坑である。長径1.3m、短径0.8m、深さ約40cmで、埋土は上が暗茶色粘質土、下が暗茶色砂質土である。土師器・須恵器・弥生土器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK206 調査区の北半西側で検出した円形の土坑である。直径0.6m、深さ約35cmで、埋土は茶灰色粘質土である。土師器の小片・石鏃が出土した。1点出土した石鏃46は先端と基部が欠損しているが、凸基有茎鏃で、弥生時代の遺物の混入であろう。土師器は図化可能なものはなかった。

SK207 調査区の北半西側で検出した円形の土坑である。長径0.6m、短径0.5m、深さ約20cmで、埋土は茶灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SK208 調査区の南東隅で検出した不整円形の土坑である。長径0.8m、短径0.7m、深さ約50cmで、埋土は中央が黒茶色粘質土、左側が暗茶色砂混じり粘質土である。土師器・須恵器・弥生土器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

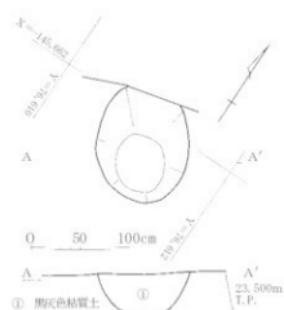
SK209 調査区の南東隅で検出した円形の土坑である。北側が擾乱で破壊されているが、直径0.7m、深さ約35cmで、埋土は上層が黒茶色粘質土、下層が黒灰茶色粘質土である。土師器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK210 調査区北側突出部の北端で検出した楕円形の土坑である。北側が調査区外に続いているが、現状で長径1.2m以上、短径1.0m、深さ約40cmで、埋土は黒灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

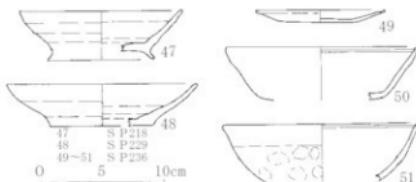
ピットは72基検出されたが、ほとんどのピットからはわずかな遺物しか出土せず^a、図化可能なものは極めて少なかった。しかし4基のピットからは図化可能な遺物が出土した。



第27図 土坑SK208・209
平面図・断面図 (1 : 50)



第28図 土坑SK210
平面図・断面図 (1 : 50)

第29図 ピット
SP218 平面図・断面図
(1:40)第30図 ピットSP229
平面図・断面図 (1:40)第31図 ピットSP236
平面図・断面図 (1:40)

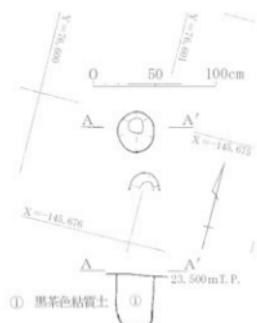
第33図 ピットSP218・229・238 出土遺物 (1:40)

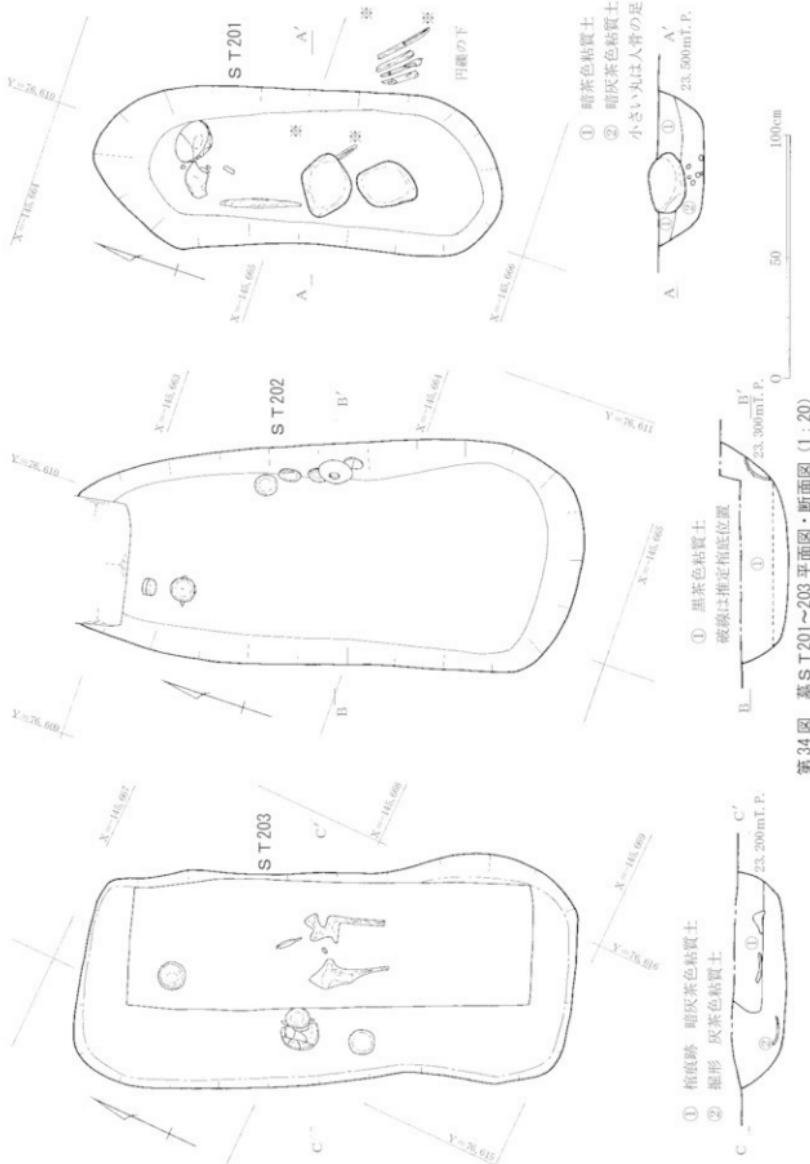
SP218 調査区の西半、戸井S E201から北東約1.5mのところで検出した平面円形のピットである。直径約40cm、深さ約50cmで、埋土は暗灰茶色粘質土である。土師器・灰釉陶器が出土した。47は厚さの薄い高台が付く回転台土師器碗である。灰釉陶器は小片で図化可能なものはなかった。

SP229 調査区の西半、集石遺構S X202の近くで検出した平面円形のピットである。直径約50cm、深さ約90cmで、埋土は暗灰茶色粘質土である。土師器・須恵器が出土した。48は回転台土師器杯である。須恵器は小片で図化可能なものはなかった。

SP236 調査区の西半、掘立柱建物S B202の北東の隅柱の横で検出したピットである。直径約40cm、深さ約30cmで、埋土は黒茶色粘質土である。土師器・黒色土器が出土した。49は「て」の字状口縁を持つ土師器小皿である。50・51は内面口縁部直下に沈線を1条持つ黒色土器碗である。ただ破片のため高台の有無は不明であり、内面の暗文は退化して施されていない。したがって戸井S E201と同様の9世紀後半頃の時期を想定しておきたい。また後述する69の鉄釘が1点出土した。

SP259 調査区の西半中央、西側調査区境界から東へ4mの位置で検出した平面円形のピットである。直径約30cm、深さ約40cmで、埋土は黒茶色粘質土である。土師器小片が出土し

第32図 ピットSP259
平面図・断面図 (1:40)



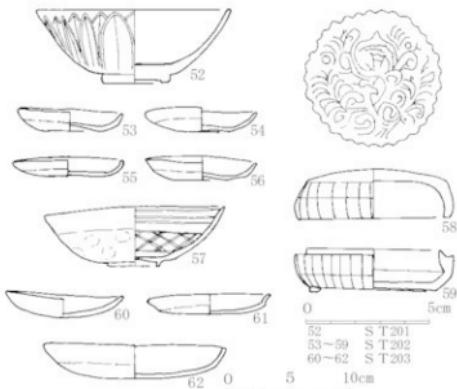
第34図 基ST 201～203平面図・断面図(1/20)

たが、図化可能なものはなかった。また後述する70の鉄釘が1点出土した。

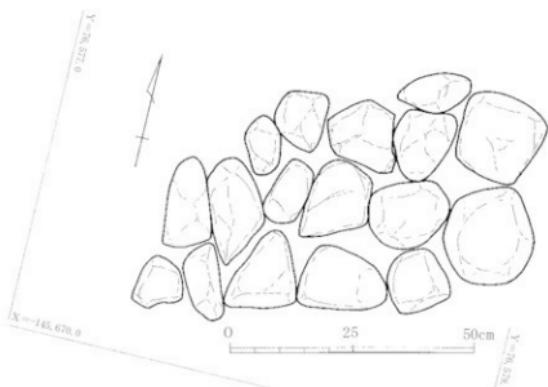
S T201 調査区北側突出部の中央で検出した土坑墓である。青磁は傾斜して出土したこと、埋土の平面形、断面にも棺痕跡がないため、土坑墓と判断した。掘形は長さ1.7m、幅0.7mの長円形で、深さ約20cm、埋土は上層が暗茶色粘質土、下層が暗灰茶色粘質土である。遺骸の上には大きさ約25cmの転磨した円鏡が置かれており、その直下で人骨の足の部分が6本確認された。骨の方向から判断すると遺骸は東に体を向けて膝で足を折り曲げられた姿勢で埋葬され、足の上の部分に円鏡が置かれていたことになる。また頭から頸の辺りの骨もわずかに残っていた。頭の前には52の青磁碗が、右手の辺りには後述する63の鉄刀が副葬されていた。また鉄刀は底から約10cm上で検出した。青磁碗は外面に錦蓮弁を持つ龍泉窯系で、高台内部を除いて釉が厚くかけられている。年代は13世紀代ころが想定され、S T202との切合関係も考慮すると、S T201は3基の墓の中で最後に埋葬されたことになる。鉄刀が底から浮き上がって検出されたことは、遺骸の上に置かれていた可能性が高い。

S T202 調査区北側突出部の中央で検出した木棺墓である。棺痕跡は目視では確認することができなかつたが、鉄刀子と和鏡が平らに置かれていたこと、合子の隙間から中に入り込んだ細粒の泥の上面が合子の底に対して傾いていた状況から、木棺の頭側の小口に立て掛けられていたと推定される。掘形は隅丸長方形で、北端が攪乱で破壊されているが現状で長さ2.1m、幅0.8~1.0m、深さ約30cm、埋土は黒茶色粘質土である。人骨は全く遺存していなかつたが、遺骸の推定頭付近の西隣に後述する65の鉄刀子1本が東西方向に置かれ、さらにその上に後述する64の和鏡が1面鏡背を上にして副葬されていた。和鏡の北側には58・59の青白磁合子が蓋身揃って副葬されていた。合子の中身は腐朽して消滅しており、腐りにくい顔料などではなく有機物であったと推定される。また墓坑東側斜面の棺外と想定される位置に53~56の土師器小皿4点を並べ、その内の2点54・56の上に重なる状態で57の瓦器碗が副葬されていた。小皿は口縁端部の外表面を強くナデて整形しているが、実用に耐えていたのかどうか怪しい位にどれも歪みが強い。瓦器碗も歪みが大きく、高台も退化して粘土紐を丸く貼り付けるだけになっている。ただ粗雑にはなっているが内面の暗文は輪状に施されている。合子の側面は蓋身とも菊座状に作られているが、形物成型であり、外形にあつた小さい段が明瞭に残っている。また釉に完全に埋まっているが、蓋の上面には植物の花状のレリーフが施されている。蓋の内面天井部と身の外底部には釉がなく、露胎となっている。

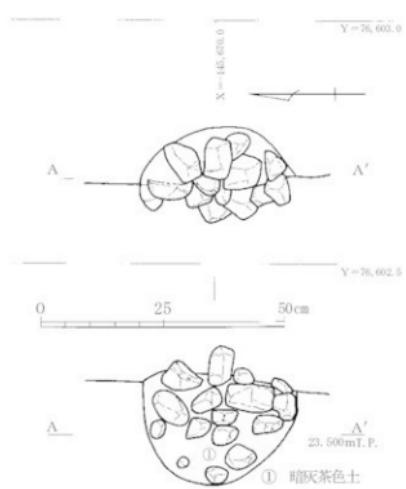
S T203 調査区中央西寄で検出した木棺墓である。棺痕跡は南端付近では判然としなかつたが、長さ約1.6m、幅約0.5mで、掘形東端にはほぼ接して配置されていた。掘形は隅丸長方形で、長さ2.1m、幅0.9m、深さ約20cm、埋土は棺痕跡が暗灰茶色粘質土、掘形が灰茶色粘質



第35図 墓S T201~203出土遺物 (1:4・1:2)



第36図 集石遺構SX201平面図（1:10）



第37図 集石遺構SX202平面図・断面図（1:10）

岩も含まれていた。明確な掘形は存在せず、石の下には遺構は存在しなかった。石と石の隙間から土師器・赤生土器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SX202 調査区の北半西側で検出した集石遺構である。西側半分が搅乱で破壊されているが、直径約30cm、深さ約20cmのピットに拳大以下の石を詰め込んでいる。石と石の間の埋土は暗灰茶色土である。石はほとんどが六甲花崗岩で、少數アブライトや布引花崗閃綠岩も含まれていた。

士である。人骨は頭骨の一部と骨盤から大腿骨のあたりが遺存していた。遺骸の腹部付近に後述する66の鉄刀子1本が副葬されていた。棺痕跡西側の墓坑の底面に62の土師器皿を置き、その上に60の土師器小皿を重ね、少し南側に離れて61の土師器小皿を置き、計3枚の土師器皿が副葬されていた。

た。61・62の皿は口縁端部の内外面を強くナデるものであるが、60の小皿はあまり強くナデではない、他の小皿より平たい形状に仕上げられている。また埋土中から後述する67の細い鉄釘が出土した。恐らくは木棺に使用されていた可能性が高いが、木棺の木組を復元できる状態ではなかった。土師器と人骨の位置関係を見ると明らかに人骨の方が約5cm高い位置にあるため、棺の下のみに墓坑を掘削した土を敷き均して棺を置き、その西隣の墓坑底の位置に3枚の土師器を副葬したことが明らかである。

SX201 調査区の北西隅で検出した集石遺構である。大きさ10~20cmの石の平たい面を上にし、長さ0.9m、幅0.5mの範囲に17個の石を敷き並べている。風化の程度に個々の差はあったが石はすべて花崗岩類で、ほとんどが六甲花崗岩であり、少數アブライトや布引花崗閃綠

第2遺構面出土金属製品 63は土坑墓ST201の副葬品で、鉄刀である。全長33.2cm、刃部長12.4cm、茎長10.8cmである。刃部は最大幅2.4cmで、棟の厚み6.1mmである。関は両闇で、腹側のほうが1mm程度、茎まで延びる。段差も腹側が深い。茎は関付近で幅1.6cm、棟の厚み3.2mmである。また中央より関寄りに目釘孔が1つ穿たれる。孔径は直径3.3mmの円形である。茎尻はやや角が取れた直線状である。刃部には切先付近に木質が残存する。木質は非常に薄いため、サンプリングしての樹種の観察はできなかったが、針葉樹材と考えられる。付着状況から鞘材の可能性が高い。

64・65は木棺墓ST202の副葬品で、64は和鏡である。直径10.0cmで、ほぼ真円である。縁は外傾式の細縁少傾で、厚さ平均1.3mm、鏡面からの高さ6.6mmである。鏡胎は全体に薄肉で、厚み1.2~1.3mmである。界囲は細線單圈で、線幅は1.6mm前後の断面半円形である。鈕座は捩菊低座で16弁、直径1.6cmである。鈕は直径6.8mmで、内区底からの高さ2.6mmである。鈕孔は幅3.0mm、高さ1.2mmである。鏡面には文様は鋳出されていない。また鏡胎の劣化がかなり進行していたため、鏡全体を覆っていた銅サビの除去を完全に実施していないことから、微細な刻銘などの有無は確認できていない。鏡背の文様は界囲と重なるように萩、薄などの秋草と2羽の鳥が表現されている。鏡式としては「草花双鳥鏡」となる。草花は鏡背右下から反時計回りに大きく展開する萩・薄と、下から左へ時計回りに巡る萩が描かれる。これらの間を埋めるように2羽の鳥が内向きに飛翔している。鳥は体長より長い尾羽を持つ。

65は鉄刀子で、茎尻を欠損する。残存長11.8cmで、刃部長9.9cmである。刃部は切先から4cm辺りにかけ徐々に幅を広げ、最大幅1.7cm、棟の厚さ3.0mmになる。関は両闇で、茎は関付近が幅9.6mmであるが、直線的に茎尻へ向け幅を減ずる。目釘孔はない。また茎には把材が残存しており、調査の結果ホオノキの板目板を用いていたことが判明している。

これら鏡と刀子は互いに重なった状態で出土したが、両者の表面には布帛の付着が観察できた。布帛は全面にわたり観察されたが、両者の間隙には存在せず、副葬時に2点を一度に包んでいたと考えられる。布そのものはかなり脆弱化しており、鏡面の一部と縁の頂部平坦面に付着して錆化したものが固定されている以外、辛うじて土砂と一緒に乗っているような状態であった。器表面から少量採取したサンプルについて調査した結果、布帛は平織りの絹であることが判明している。

66は木棺墓ST203の副葬品で、鉄刀子である。全長11.2cm、刃部長6.3cmである。刃部は切先から関にかけて徐々に幅を広げ、最大幅1.6cm、棟の厚さ3.7mmである。関は両闇である。茎は関付近で幅9.6mmであるが急速に幅を減じ、関から1cm前後で幅5mm程度となり、茎尻に至る。目釘孔はない。茎尻から2cm付近にかけ木質が残存しており、把材と考えられる。

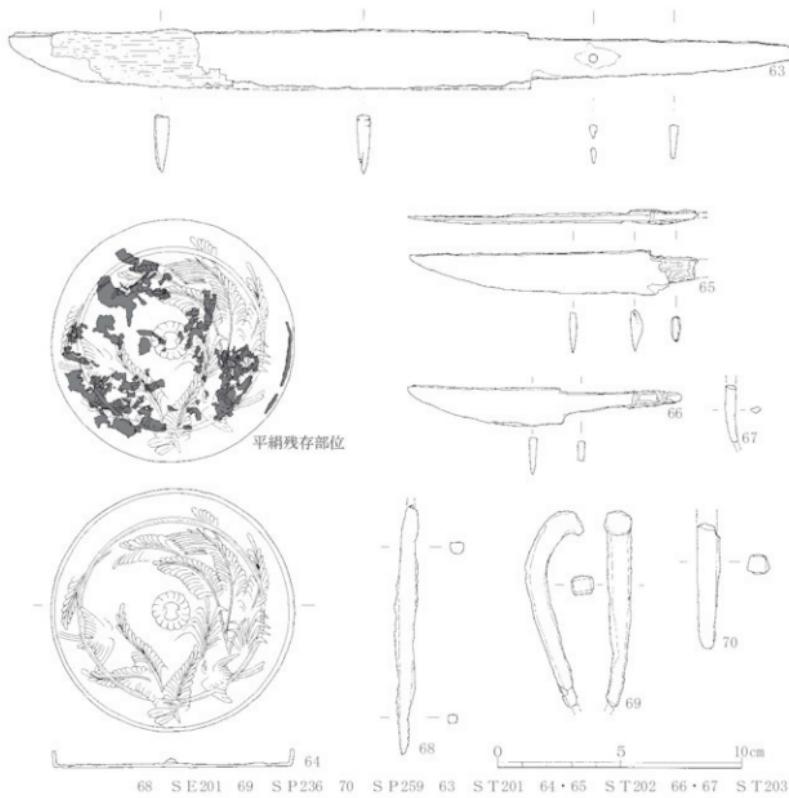
67は木棺墓ST203の埋土中出土の角釘で、頭部と先端を欠損する。残存長2.4cm、身部幅4.4mmである。木棺に打たれていた可能性が高いが、腐食したのか他の釘は確認されなかった。

68は井戸SE201出土の角釘で、頭部を欠損する。残存長10.3cm、身部幅6.0mmである。

69はピットSP236出土の角釘で、頭部形状から頭巻釘とわかる。身部は中央や上部で内湾する。全長8.1cm、頭部幅1.1cm、身部幅8.5mmである。

70はピットSP259出土の角釘で、頭部と先端を欠損する。残存長5.2cm、身部幅7.5mmである。

第2遺構面出土金属製品の文化財科学調査【和鏡の調査】今回出土した和鏡について、X線ラジオグラフィでの構造調査と、蛍光エックス線分析による鏡素材の調査を実施した。これ



第38図 第2遺構面出土金属製品（1:2）

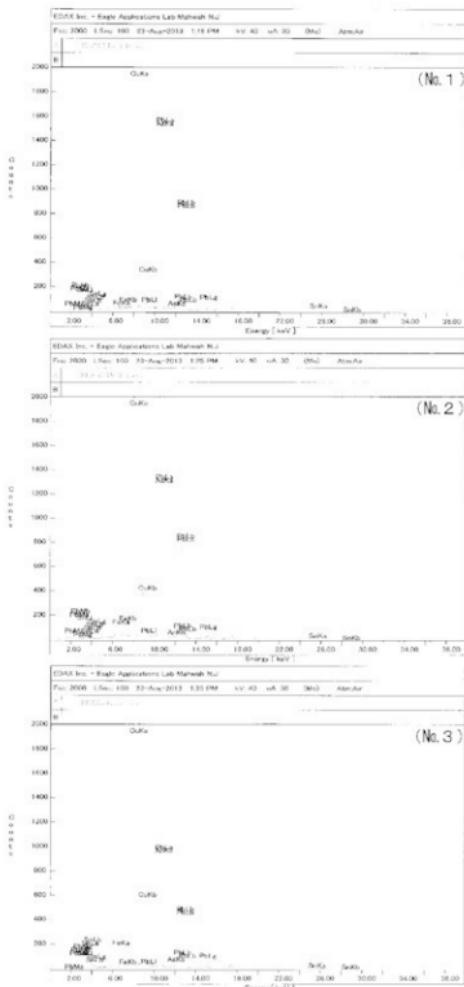
らの調査は、遺物を非破壊で調査することが可能であり、文化財の劣化状態や製作技法の解明に寄与する情報が得られる。

X線ラジオグラフィを用いた調査では、今回のように表面がサビや有機質に覆われている状況下でも文様の観察が可能であった。また外区上方、鉢左上にX線吸収の斑が観察できる。これらは鋳造時の湯流れの斑によるものと考えられる。劣化の状態であるが、全体にかなり進行が認められ、保存に向けた処置の方針決定に寄与するものであった。

蛍光エックス線分析調査は、鋳造に用いられた素材を推定するために有効な調査法である。今回の調査では、(独)奈良文化財研究所保存修復科学研究室のご協力を得、下記の条件で分析調査を実施した。分析した部位は鏡縁頂部の黒色部(No.1、No.2)と灰色部(No.3)の3か所について定性分析を実施した。結果、第39図、第1表に示した分析データが得られた。

【分析機器】EDAX EAGLE III

【測定条件】管電圧:40KeV、電流:30μA、測定時間:100秒



第39図 和鏡の蛍光X線分析スペクトル

分析結果からは、銅 (Cu)-スズ (Sn)-鉛 (Pb) を基本として、微量のヒ素 (As) が含まれる青銅を用いていたことが判明した。少量の鉄 (Fe) が検出されているが、付着土砂の影響と考えられる。

【有機物の調査】今回出土した和鏡、鉄製品には有機物の付着残存が認められた。これらの調査について以下に記す。

和鏡と刀子全体を覆っていた布帛をルーペによって観察すると、織り目が密なものと、粗く

第1表 和鏡の蛍光X線分析結果

	PbM	SnL	FeK	CuK	AsK	PbL	SnK	積分強度 (cps/mA)
No. 1 黒色部	8.15	1.62	7.21	322.23	267.1	299.25	8.28	
No. 2 黒色部	11.35	0.39	14.36	384.08	236.34	270.88	9.58	
No. 3 灰色部	6.27	29.56	25.98	599.87	174.57	198.09	10.74	

透けたもの（写真図版35-1～3）が観察できる。糸の太さは密なもので約180～280μm、粗いもので140～200μmである。織り密度はいずれも絹糸が33～43本/cm、緯糸が30～40本/cm程度であった。多少の誤差はあるが、経緯比はどちらもほぼ1:1である。また単糸は粗いものは2本、密なものも複数の単糸で構成され、撚りはほとんどかけていない。このような状況からこれら布帛は平綱であり、特に粗いものは簇目の平綱の可能性がある。両者の重なりであるが、密な平綱が鏡に密着している部位と、簇目の平綱が密着している部位があり、詳細は判然としなかった。あるいは、二者は同一の織物であり、部位によって糸の太さに差があるか、劣化の過程で糸が痩せて簇目に見えているだけかも知れず、今後さらに検討の必要がある。

さらに採取した布帛資料をエポキシ系合成樹脂で包埋し、薄層プレパラート化した上で顕微鏡観察を行なった。写真図版31-4・5では横走する絹糸を上下から挟む形で緯糸の横断面が観察できる。中央の緯糸断面は扁平な人形面を呈する。写真5では、やや膨らみのある三角形から細長い三角形までばらつきがあるものの、網の単纖維横断面に特徴的な形状が観察できた。現状で観察した限りでは、糸1本当たり250～300本の単纖維を束ねてある。単纖維の長径は13～15μmである。

写真図版31-6は絹糸の横断面と緯糸の縦断面になる。写真上半が網であり下半は付着土壌であるが、腐食劣化のため詳細な観察は困難である。直線的な絹糸の上下に交互に絹糸の断面が観察できる。

65の鉄刀子の把装具について、樹種同定調査を実施した。表面を実体顕微鏡によって観察した結果、広葉樹の散孔材であることが判明した。これをさらに少量サンプリングし、布帛同様樹脂に包埋して薄層プレパラート化し、生物顕微鏡にて観察した。結果はホオノキ（モクレン科）であることが判明した。以下に同定根拠を記す。

写真図版31-7は木口断面である。中央付近に年輪界が存在するため、2年輪分になる。散孔材で、単独か、まれに2個の道管が均等に存在している。放射組織は1～2列で、多くは2列で均等に存在する。

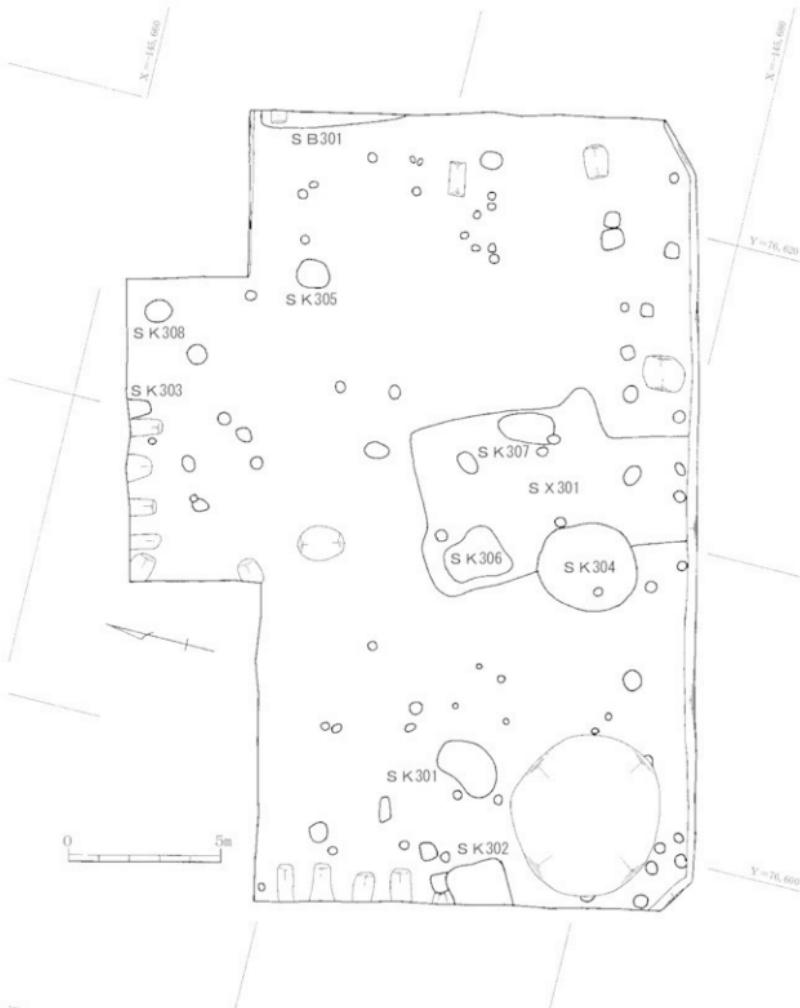
写真図版31-8は板目断面である。中央付近に縦走する道管が存在するが、その側壁に階段壁孔が並んでいることがわかる。木纖維は隔壁を有する。放射組織はほとんどが2列で、5～20細胞高を数える。

以上の調査により、

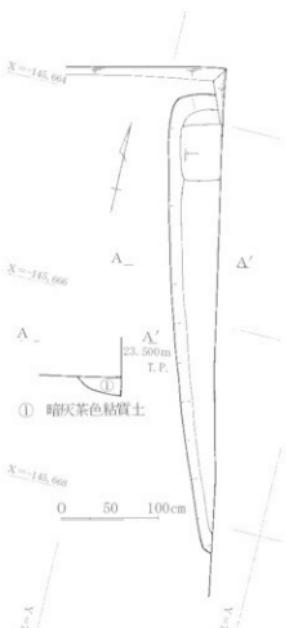
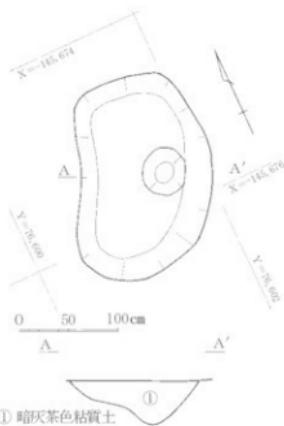
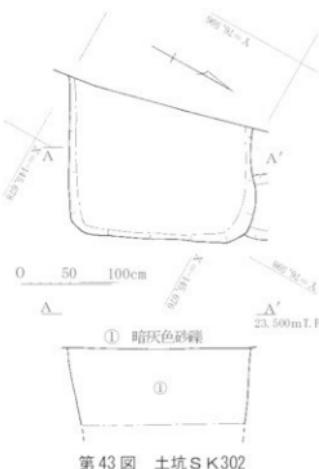
- ・木棺墓ST202に副葬されていた和鏡は微量のヒ素を含む青銅製である。
 - ・和鏡と刀子は、網織物に包まれた状態で置かれていた。包んでいた織物は平綱で、密な織りと簇目のもの2種類があつた可能性もある。
 - ・65の鉄刀子の把にはホオノキが使用されていた。ホオノキは均質で柔らかい、加工性の良好な材である。古墳時代の鉄剣装具などにも使用された実例がある。
- という結果が得られた。しかしこれでも不明な点が多く、今後も継続して調査を行う必要がある。

第4節 第3遺構面

弥生時代中期から古墳時代後期の遺構面で、堅穴建物1棟・土坑8基・落ち込み1基の他、76基の多くのピットを検出した。ただ明確に掘立柱建物を構成する様な柱穴となるピット列は確認されなかった。調査区の南東隅から約3m西側で、下層の遺物包含層に弥生土器が大量に含まれている部分があったが、その下の遺構面上には弥生時代の遺構は存在



第40図 第3遺構面平面図 (1:160)

第41図 積穴建物S B301
平面図・断面図(1:50)第42図 土坑S K301
平面図・断面図(1:50)第43図 土坑S K302
平面図・断面図(1:50)

していなかった。

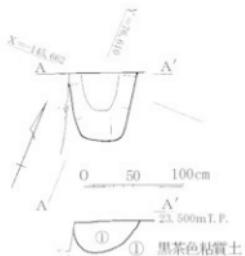
S B301 調査区の東端で検出した方形の堅穴建物である。大半の部分が調査区外に続いているが、現状で一辺 4.7m である。深さ約 20 cm で、埋土は暗灰茶色粘質土である。土師器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

S K301 調査区の西側で検出した不整楕円形の土坑である。長径 2.2m、短径 1.4m、深さ約 70 cm で、埋土は暗灰茶色粘質土である。土師器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

S K302 調査区の西端で検出した方形の土坑である。調査区外に続いているため全体の規模は不明であるが、一辺 2.0m である。深さは約 80 cm まで確認したが、工事影響深度の関係で掘り下げを中止した。埋土は暗灰茶色砂礫である。土師器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

S K303 調査区突出部の北端で検出した土坑である。調査区外に続いているため全体の形状や規模は不明であるが、現状で長さ 0.7m、幅 0.7m、深さ約 30 cm で、埋土は黒茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

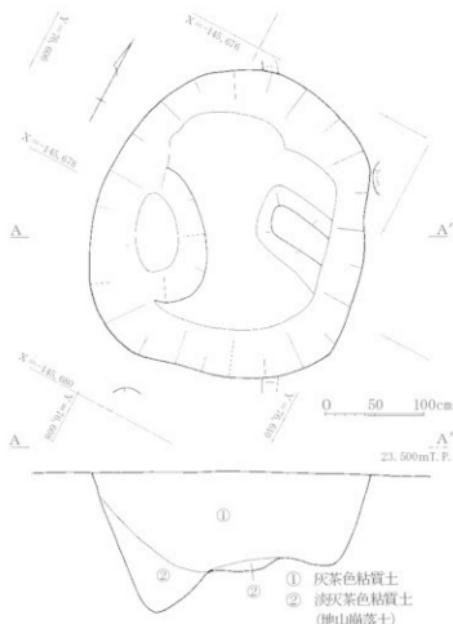
S K304 調査区の南半中央で検出した大きな不整円形の土坑である。長径 3.2m、短径 2.8m、底には



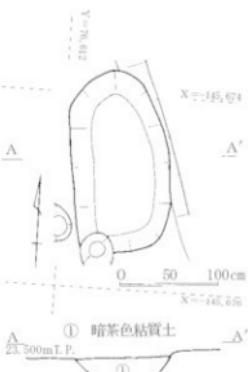
第44図 土坑SK303
平面図・断面図 (1 : 50)



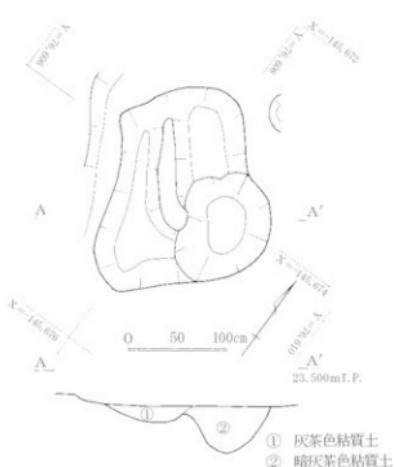
第46図 土坑SK305
平面図・断面図 (1 : 50)



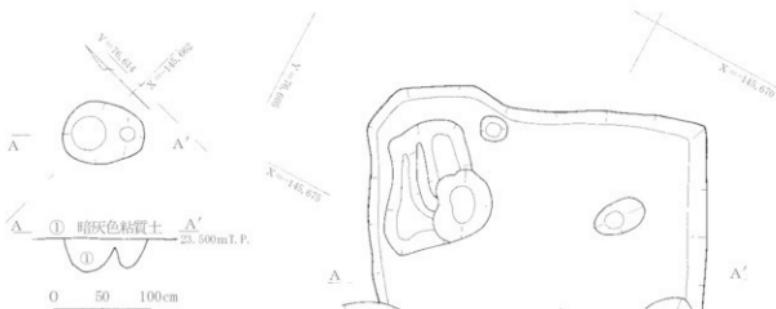
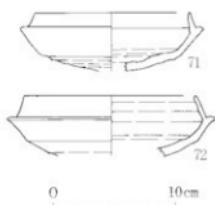
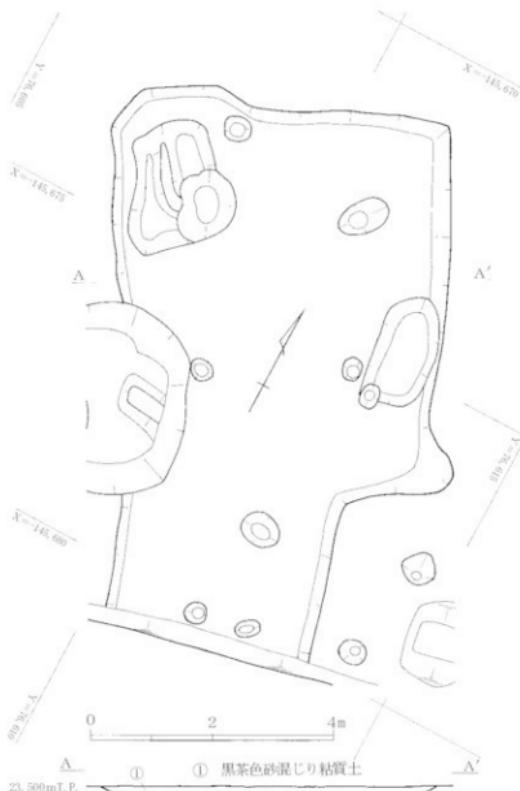
第45図 土坑SK304 平面図・断面図 (1 : 50)



第48図 土坑SK307
平面図・断面図 (1 : 50)



第47図 土坑SK306 平面図・断面図 (1 : 50)

第49図 土坑SK308
平面図・断面図(1:50)第51図 落ち込みSK301
出土遺物(1:4)

第50図 落ち込みSK301 平面図・断面図(1:80)

若干の起伏があり、一番深い部分は深さ約 140 cmである。埋土は灰茶色粘質土であるが、地山の崩れた土が底や斜面部分には堆積している部分もあった。土師器・須恵器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK305 調査区の西半北側で検出した不整円形の土坑である。長径 1.0m、短径 0.9m、深さ約 40 cmで、埋土は暗灰茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

SK306 調査区の中央で検出した不整形の土坑である。長さ 2.0m、幅 1.8m、底には起伏があり、一番深い部分は深さ約 50 cmである。埋土は東側が暗灰茶色粘質土、西側が灰茶色粘質土である。土師器・須恵器の小片が出土したが、図化可能なものはなかった。

SK307 調査区の南半中央で検出した梢円形の土坑である。長径 1.8m、短径 1.0m、深さ約 30 cmで、埋土は暗茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

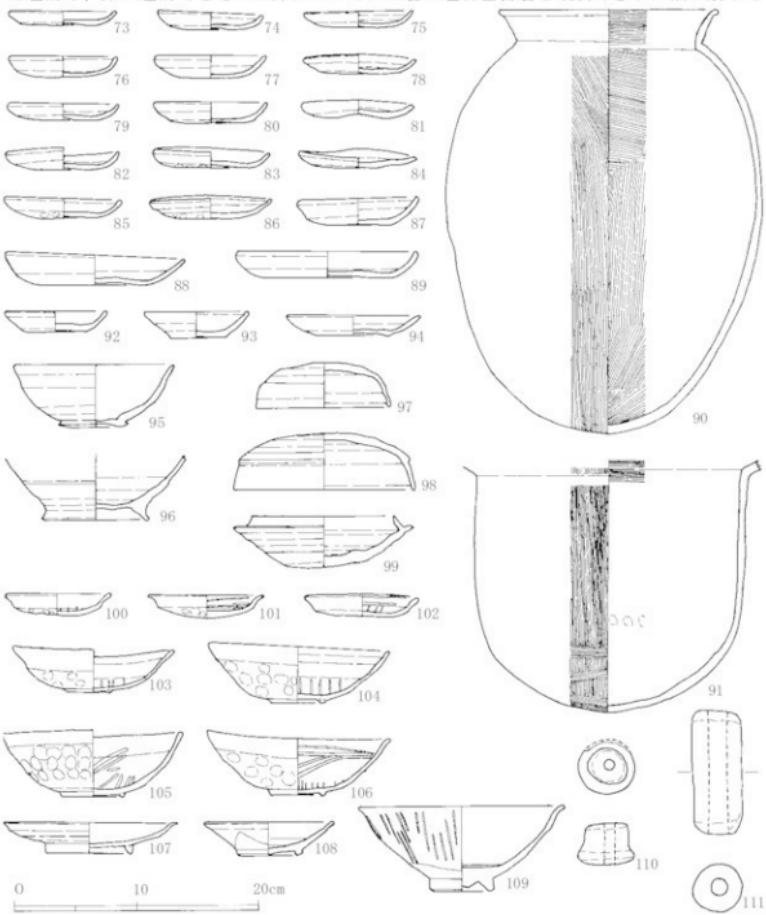
S K308 調査区突出部の東端で検出した楕円形の土坑である。長径 0.8m、短径 0.6m、底には起伏があり、一番深い部分は深さ約 30 cmで、埋土は暗灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。

S X301 調査区の南半中央で検出した不整形の浅い落ち込みである。南側は調査区外に続くため全体の規模は不明であるが、現状で長さ 9.3m、幅 3.5~5.5m、深さ約 20 cmで、埋土は黒茶色砂混じり粘質土である。土坑 S K304・306・307 に切り込まれている部分を除いて底面の起伏は、北側はほぼ平であるが、調査区南壁に近い南側には若干の起伏がある。土師器・須恵器・弥生土器が出土した。71・72 はともに須恵器杯身で、6世紀中頃のものである。土師器・弥生土器は小片で、図化可能なものはなかった。

ピットは 76 基検出したが、ほとんどのピットからはわずかな遺物しか出土せず、図化可能なものはなかった。

第5節 遺物包含層

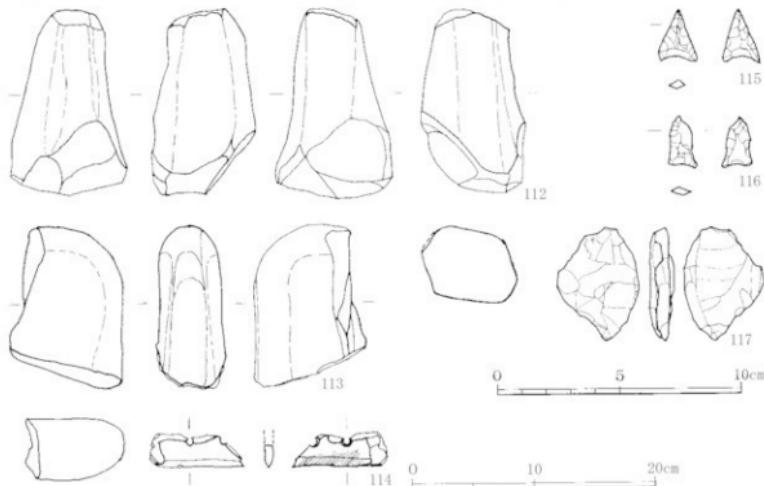
本章第1節で記したとおり、第1遺構面は遺物包含層の暗茶色粘質土の上面、第2遺構面は遺物包含層の暗茶色砂混じり土の上面、第3遺構面は地山の黒茶色～茶褐色粘質土の上面である。そして第3遺構面の基盤層である地山の黒茶色～茶褐色粘質土を除き、各遺構面間の遺物包含層から多くの遺物が出土した。しかし本来の第2遺構面上では遺構と遺構周囲の基盤層との識別が極めて困難であったため、少しでも識別できるように約10cm、本来の遺構面を削り込んで遺構を検出している。このため第2遺構面については浅かつた遺構や、深い遺構でもその上部については上層の遺物包含層と岐別できずに掘り崩して



第52図 上層遺物包含層出土遺物1 (1:4)

しまっていることになる。したがってここで記載する上層包含層の出土遺物については、本当ならば第2遺構面の遺構から出土していたはずの遺物が混じり込んでいる可能性があることを留めおき頂きたい。

上層遺物包含層出土遺物 暗茶色粘質土と、一部暗茶色砂混じり土の上部から出土した遺物である。73～87は土師器小皿である。81・82・84のように実際に使用が可能かどうか疑わしくなるほど歪んでいるものも含まれているが、直径は9～10cm、高さは87を除いて2cmより少し低い数値で共通している。86は少し他より高く、2cmを越えている。歪の強弱にかかわらず、口縁部の内外両面を強くヨコナデしている。口縁端部は三角形に近くなるよう意識的に強くナデしているものと、特に三角形を意識せずに丸くまとめているものが混在している。88・89は土師器皿であるが、88には少し歪がある。口縁部の内外両面を強くヨコナデしている。89は口縁端部が三角形に近くなるよう意識的に強くナデしている。90は長胴の体部の土師器甕で、口縁端部を少し外側につまみ出している。内外面ともにハケメが顕著であるが、口縁部付近はハケメ後に丁寧にナデしている。91は丸底から体部が直線的に立ち上がり、屈曲して口縁部になる土師器甕であるが、口縁端部は遺存していない。外面はハケメが卓越するが、内面は頸部から口縁部にしかハケメは見えない。わずかに指頭圧痕が見られるのみである。92～94は須恵器小皿である。底部外面は回転糸切で、その他の部位は回転ナデである。92・93は口径約8cm強であるが、94は約11cmと少し大きい。95は須恵器碗である。体部が丸く、内面見込みが1段くぼんでいる。外面底部は回転糸切である。96は体部外面に1条沈線をめぐらす須恵器碗である。口縁端部まで遺存していないが、内外面ともに丁寧にナデされている。97は須恵器杯蓋であるが、口縁部が少し直線的で短頸壺の蓋の可能性もある。98・99は須恵器杯蓋・杯身であるがセットでは



第53図 上層遺物包含層出土遺物2 (1:4・1:2)

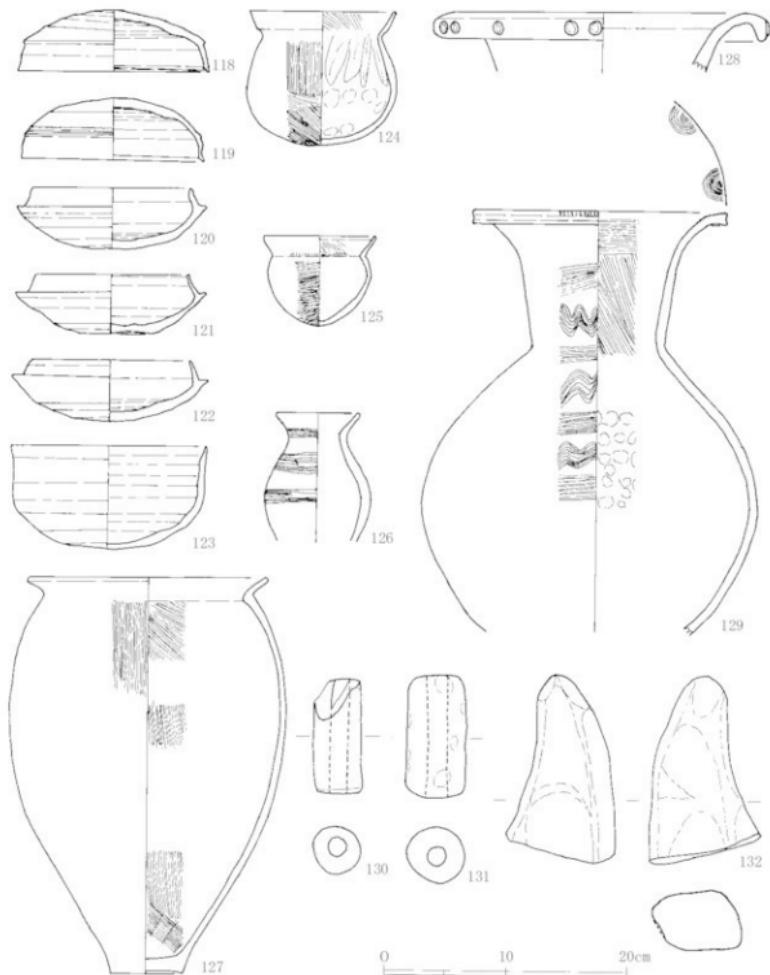
ない。蓋の天井部と口縁部の境には回線があり、身の内面底はナデによる凹凸が著しい。100～102は瓦器小皿である。口縁部の内外面を強くナデ、外面底部は指頭圧痕が顕著である。内面には退化した暗文が施されている。103～106は歪みが顕著な瓦器椀である。小皿同様に口縁部の内外面を強くナデ、外面体部～底部は指頭圧痕が顕著である。内面には退化した暗文が施されている。高台も退化が顕著で、矮小化した細いものや、丸い粘土紐を円形に貼り付けただけのものになっている。107は灰釉陶器皿である。外面下半分は回転ヘラケズリ後に高台を貼り付けている。外面上半分と内面は丁寧に回転ナデを施す。内面見込部分と外面高台部分には施釉されずに露胎になっている。108は白磁皿である。内面には重ね焼きのための蛇の目釉ハギがあり、外面高台付近より下部には釉がかからず露胎になっている。109は青磁碗である。内面は無文であるが、外面には数本を1セットとし、刻みの始めと終わりを「U」字形に揃えた線刻文様が刻まれている。釉は削り出し高台の少し外側までにしか施されていない。110は土製の紡錘車である。111は管状土錐である。112は砂岩製の砥石である。上下が欠損して四角錐台のような形状になっているが、破断面を除くと4面とも使用されて平滑になっている。通常使用が進んだ砥石は両端が太く中央が細い形状になるため、破断する前は結構大きかった可能性が高い。113は砂岩製の石皿である。図中左端の面は使用が進んで凹んだ平滑面になっている。図中右端の面は平滑に磨られてはいるものの少し膨らんだ面になっている。図中中央の側面も図面化した部分は平滑に磨られているが、図上部の部分はあまり磨られていない。据え置いて使用する際、効率よい使用方法に適した配置等にするために、裏面・側面とは擦り付けの状況・程度・位置が異なっていたと考えられるよう。114は粘板岩製の石包丁である。欠損部分が多く再利用が難しいために捨てられた可能性が高い。115・116は石鎌である。ともに脚の一部を欠損するが、両者とも回基無茎鎌に分類され、弥生時代の遺物の混入であろう。117はスクレーパーである。しかし原面を多く残している他、刃部成型の剥離方法が粗雑なため、剥片に刃を急速作り出した石器の可能性が高い。弥生時代の遺物の混入であろう。

上層遺物包含層から出土した遺物は中世～古墳時代後期に及ぶ多くの時代の遺物が混在している。古墳時代や弥生土器の遺物は下の遺構面がまさにその時代であるため、何らかの理由で遊離して混入してきた遺物と判断される。第2遺構面の遺構から出土した遺物に極めて近い時期が想定される遺物の場合、その評価には少し慎重さが必要である。

下層遺物包含層出土遺物 暗茶色砂混じり土及び暗茶色砂混じり粘質土から出土した遺物である。118・119は須恵器杯蓋、120～122は須恵器杯身である。わずか1型式程度であるが、上層遺物包含層の須恵器よりは古い様相を示す。123は須恵器椀である。丁寧な回転ナデ調整が施されている。124は土師器甕である。古墳時代後期頃には通有に見られるタイプである。125は土師器小型丸底壺である。SK202出土43・44とは少し形状が異なる。126は弥生土器小壺である。粗雑な施文ではあるが、櫛描文や櫛描波状文を意識している。127は弥生土器甕である。内外面ともにハケメが施されていたが、その後ナデられてハケメは不鮮明になっている。128・129は弥生土器広口壺である。128は口縁部付近のみであるが、下垂した口縁端部外面に円形付文が施されている。129は内面にはハケや指頭圧痕で成型の痕跡が残り、外面は櫛描文や櫛描波状文が多く施されている。口縁端部には1条の回線をいれ、その上部に細かい刻みを施す。口縁端部上面に櫛描原体による同心円状の扇型の文様を描いている。130・131は管状土錐である。132は砂岩製の砥石である。

欠損している部分がどのくらいの大きさであったのか不明であるが、現状では少し歪んだ平たい牛角状の形状である。図中左端の面は側面部分と図の上部は使用されず平滑な面になっていない。図の下部のみ使用されて平滑になっている。図中右端の面も同様に図の下部しか使用されて平滑になっていない。

下層遺物包含層から出土した遺物は古墳時代後期～弥生時代中期の範囲に収まる。上層遺物包含層と異なり、下の第3構造面の時期を確定する根拠としても捉えられる。



第54図 下層遺物包含層出土遺物 (1:4)

第4章 まとめ

今回の調査地点は遺跡の中でも平安時代末頃の掘立柱建物や大規模な塹・溝等が確認されている神戸大学医学部構内や、平頼盛の山荘の伝承がある荒田八幡神社にも近く、平安時代末頃の遺構が確認される可能性があった。調査の結果3面の遺構面と多くの遺構を確認した。

第1遺構面は江戸時代頃のビットが一部分集中して確認したのみである。

第2遺構面は平安時代から鎌倉時代の遺構面で、平安時代前期の井戸、平安時代末頃の掘立柱建物・木棺墓、鎌倉時代の掘立柱建物・土坑墓を検出した。平安時代前期の井戸は湧水層までが深いのか、かなり大規模の井戸である。残念ながら安全上の配慮のために完掘することはできなかつたが、当該時期の遺構は当遺跡内ではあまり確認されておらず、新たな資料を呈するものである。掘立柱建物と墓については切合関係から掘立柱建物SB201が木棺墓ST203より後出するものであり、今回確認された3基の墓が掘立柱建物に伴う屋敷墓になるとすれば、掘立柱建物SB204と木棺墓ST202あるいは203、掘立柱建物SB201と土坑墓ST201が組合せになる可能性が高い。その場合土坑墓ST201に副葬されていた青磁は確実に鎌倉時代中頃の時期が想定されるため、平氏の時代以降の当該地周辺での人々の活動を示す資料になる。

第3遺構面は弥生時代中期から古墳時代後期の遺構面で、堅穴建物・土坑・落ち込みを検出したが、遺構内から出土した遺物の量は意外と少なく、遺構の時期比定が難しい。SB301も土師器の小片が少量しか出土していないが、形状や規模から方形の堅穴建物になる推定は大過ないと判断される。北側の道路をはさんで当該地の北西に向かいで平成13年度に実施した第30次調査でも古墳時代の堅穴建物2棟と掘立柱建物1棟を確認しており、周辺には古墳時代後期の集落が展開していることが明らかになってきている。弥生時代中期の土器は調査区内の南東隅近くの遺物包含層中に濃密に含まれている部分があつたが、遺物包含層の下の遺構面上には遺構として明確なものは存在しなかつた。

第3遺構面の基盤層である調査区東半の黒茶色粘質土は、土質から遺物包含層の可能性もあつた。南壁沿いを一部掘り抜いて下層の遺構・遺物の有無を確認したが、確認はされなかつた。

今回の調査成果から考えられる点がいくつか存在する。ひとつは平安時代前期の井戸が確認されたことである。井戸は湧水層が深くてかなりの深さがあり、安全上の配慮から検出面から約5m、地上からは約6mの深さで掘削を停止した。したがつて出土した遺物はあくまでも井戸が埋没していく過程のものであり、井戸が掘削された時のものではない。そうであつても灰釉陶器・緑釉陶器を含む遺物が数多く出土した。これまで楠・荒田町遺跡ではこの時代に関する明確な遺構・遺物はあまり確認されていなかつた。今回確認されたのは井戸のみで、規模の大きな掘立柱建物群や掘立柱塀・区画溝などといった都の貴族の邸宅を構成する遺構が確認されたわけではない。しかし今後近隣至近地で確認される可能性が非常に高くなつた。一方北東約700mに所在する下山手北遺跡では園地を備えた平安時代前期の貴族の邸宅跡が確認されている。当然ではあるが、楠・荒田町遺跡が含まれる福原の地は平安時代末までずっと田畠しか存在せず、平氏によって始めて開発されたとは考えがたい。古くから交通・運輸の要衝であった大輪田の泊を南方約2.5kmに控えたこの地一帯は、田畠以外に何の手も加えられなかつたとは思えない。現実には貴族の別邸や受領の邸宅、港湾の管理場所等は近傍のどこかに所在したであろうし、相応の人物が生活していたはずである。その個別の敷地や建物等は大きさにこそ差はあるが、実例の一つが下山手



第55図 平氏関連4遺跡と周辺微地形復元図（1：10,000）

北遺跡の邸宅や、今回検出した井戸なのである。平清盛が福原の地と関わりを持つのが応保2(1162)年や仁安3(1168)年であったにせよ、既存の施設を最初は足がかりとしつつ、自らの構想に合った姿に造りかえていった可能性もある。

また掘立柱建物と墓の関係である。本例が屋敷墓で掘立柱建物とセットになり、建物の時期を規定するかは一考の余地があるが、屋敷墓だとすれば、掘立柱建物SB204と木棺墓ST202か木棺墓ST203、掘立柱建物SB201と土坑墓ST201が組合せになる可能性が高い。掘立柱建物からの遺物の出土が乏しく、また各柱穴の切合関係が調査区内では確認できなかったことから掘立柱建物の時期比定が困難であるが、仮に墓3基が掘立柱建物2棟の屋敷墓であったと仮定すると、掘立柱建物SB204と木棺墓ST202あるいは木棺墓ST203の時期は平安時代末頃、掘立柱建物SB201と土坑墓ST201が鎌倉時代前半頃の時期が想定される。この2棟ともに調査区外に繞くため正確な規模や桁行方向が確定できないが、仮に南北方向建物と仮定すると、建物の向きの差はわずか 2° しかない。調査では本来の構面をかなり削り込んで検出したこともあり、掘立柱建物SB201・SB204はともに總柱建物であっても柱穴の規模や深さがあまりに小さく浅い。平成23年に調査され、同じ平氏関連遺跡である祇園遺跡第14次調査で確認された掘立柱建物SB11～13も柱穴の規模が小さい。掘立柱建物SB201・204は平氏中心人物や、福原京へ下向した平氏に協力的な都の官人、下向した皇族のために準備された掘立柱建物とはとても考えがたい。また屋敷墓が平氏中心人物、官人、ましてや皇族にあるとも考えがたい。したがってこれらの掘立柱建物は、元来福原の地に居住して平氏一門を支えた在地の有力者の屋敷の一部と考えられる。平氏が福原の地を去った後でも、平氏一門を支えていた時の掘立柱建物の方向をほぼ踏襲して掘立柱建物を建て替えていたことになる。

遺構ではないが、今回の出土遺物は調査直後の段階で、28リットル入りのコンテナで22箱分出土した。その後遺物整理が進行する中でも瓦の破片が極めて少ないと判った。現地での調査中もその傾向を感じていたが、軒瓦は皆無であるばかりか、丸瓦か平瓦か判断付きにくい小片を含めても20点足らずしか出土しなかった。このことは調査地点および近隣に関しては立派な瓦葺の建物は存在していないことを意味している。かつて国道428号線の拡幅のために実施された祇園遺跡第2・5次調査では、貴族の邸宅の闇地を検出し、京都系土師器皿を含む大量の土器、京都あるいは播磨で焼かれた軒丸瓦・軒平瓦を含む多くの瓦が出土している。また天王谷川をはさんで祇園遺跡の西側に隣接している雪御所遺跡からは、明治39年に淡山小学校校地の工事の際に多量の土器や瓦が発見されたと伝えられ、平氏関連の遺跡としての存在が確認された。これらの状況と今回の成果とは大きくかけ離れており、少なくとも調査地点には平氏一門の重要な人物が居住していた場所の可能性は低くなつた。

掘立柱建物SB201・204の方向は調査地点周辺の現在の地割とは一致しないが、第46次調査他で確認されている大規模な塙の方向にはほぼ直行しており、一帯で同方向を意識した都市計画に基づく可能性が高い。当時の文献資料等を根拠とし、今回の調査地点から北北西約150mに鎮座する荒田八幡宮はかつて平頼盛の邸宅跡と伝えられている。また雪御所遺跡は平重衡や平清盛の邸宅が所在したと考えられている。邸宅の実証は確定していないが、これらの邸宅を街区に取り込んで福原京が計画され、一部着工されていたことは文献資料にも記載されている。この福原京は遷都当初の和田京案ではなく次善策とも言うべきものであったが、その都市計画の一端が今回の調査で垣間見えたと言える。しかし福原京着工のわずか数ヶ月後の治承4(1180)年11月には平安京への還都が行われた。在地の有力者は福原に残ったであろうが、神戸発展の礎を築いた平清盛であったが、都を神戸に造る夢は夢も潰えてしまったのだった。

楠・荒田町遺跡

第 53 次発掘調査報告書

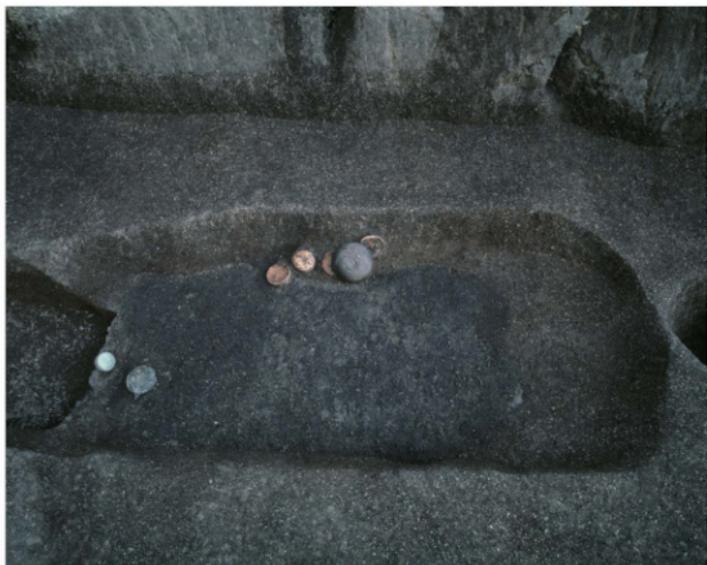
写 真 図 版



1. 土坑基 S T201 (西から)



2. 土坑基 S T201 出土遺物



1. 木棺墓 S T 202 (西から)



2. 木棺墓 S T 202 出土遺物



1. 木棺墓 S T202 青白磁合子



2. 木棺墓 S T202 青白磁合子蓋



3. 木棺墓 S T202 和鏡鏡背



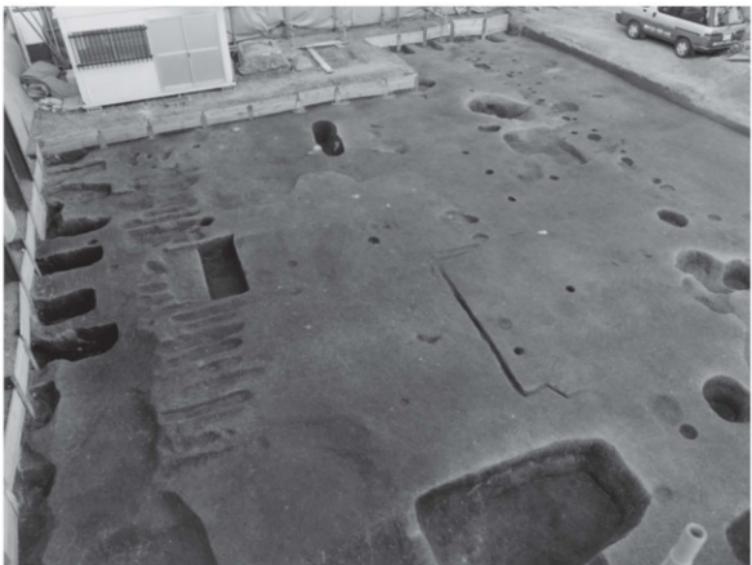
4. 木棺墓 S T202 和鏡鏡面



1. 木棺墓 S T 203（南から）



2. 木棺墓 S T 203 出土遺物



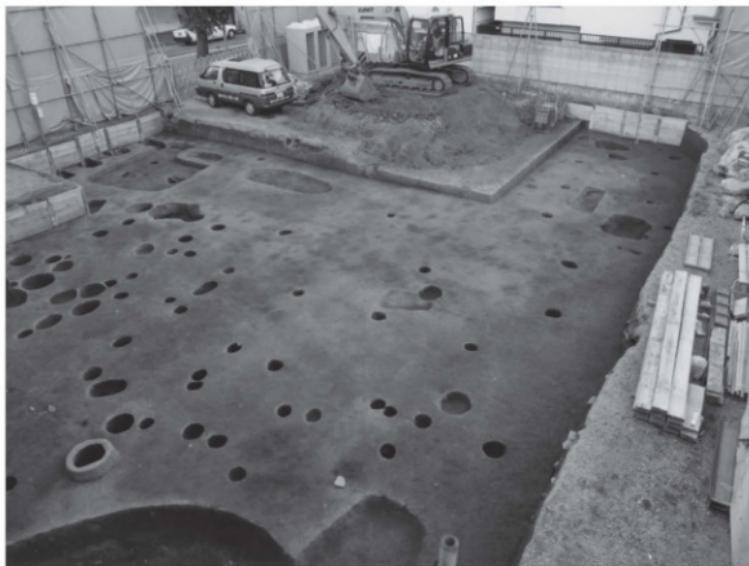
1. 第1遺構面全景（南から）



2. 第1遺構面ピット群（南から）



1. 第2遺構面全景（東から）



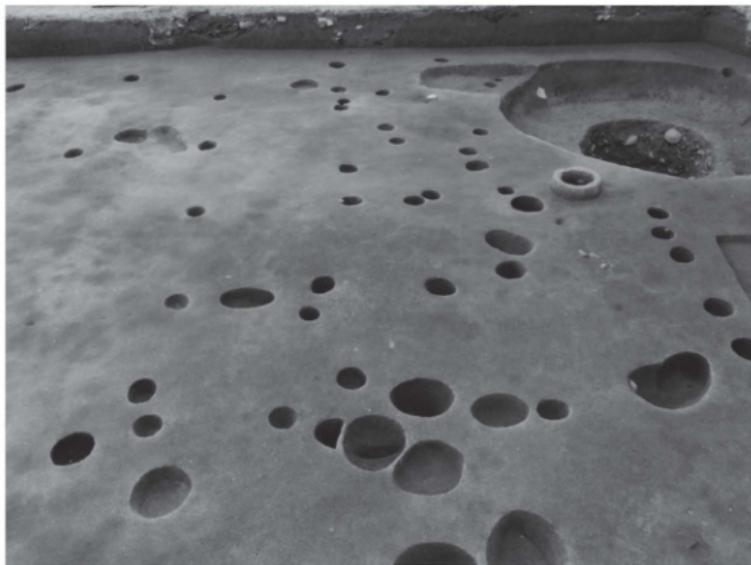
2. 第2遺構面全景（南西から）



1. 掘立柱建物 S B201・204 (南から)



2. 掘立柱建物 S B201 の一部 (西から)

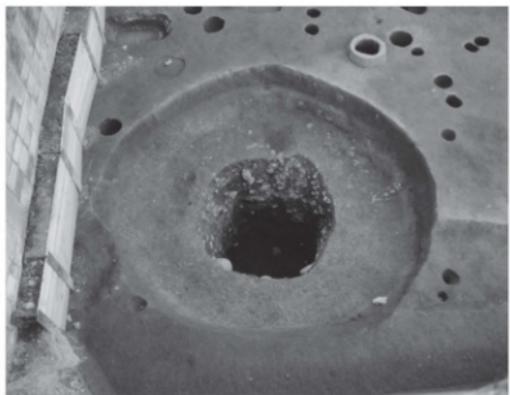


1. 据立柱建物 S B202 (北から)



2. 据立柱建物 S B203 (南東から)

1. 井戸 S E 201
掘形形状（南から）



2. 井戸 S E 201
掘形内部（東から）



3. 井戸 S E 201
掘削停止深度（東から）

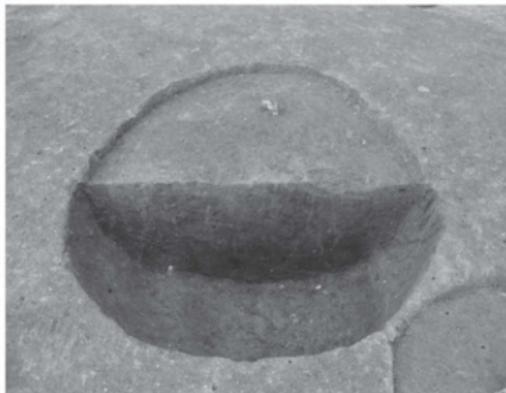




1. 土坑SK201・202（南西から）



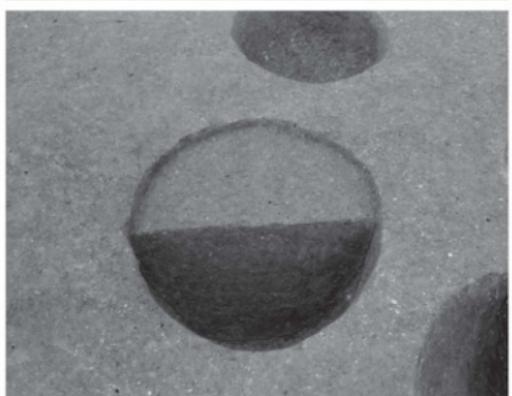
2. 土坑SK203（東から）



3. 土坑SK204（東から）



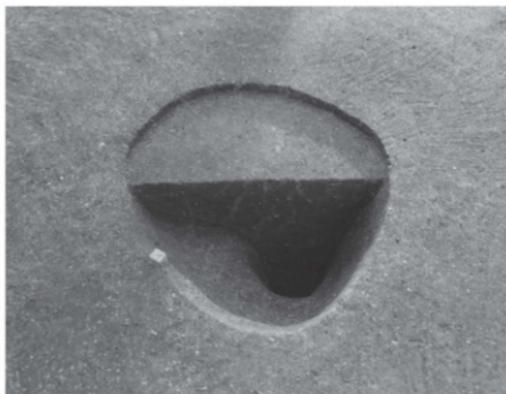
1. 土坑SK205（東から）



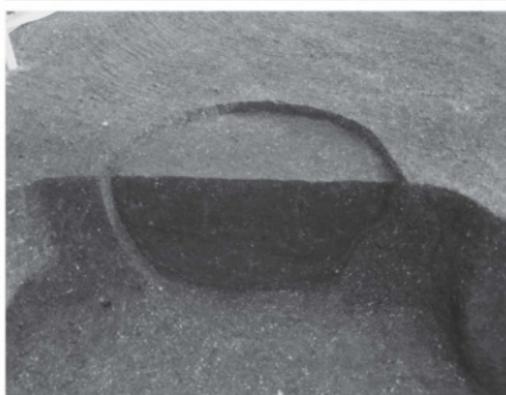
2. 土坑SK206（東から）



3. 土坑SK207（東から）



1. 土坑SK208（北東から）



2. 土坑SK209（北東から）



3. 土坑SK210（南西から）



1. 土坑墓 S T201 (南から)



2. 土坑墓 S T201 副葬遺物配置 (北から)



1. 土坑墓 S T201 遺存足の骨（西から）



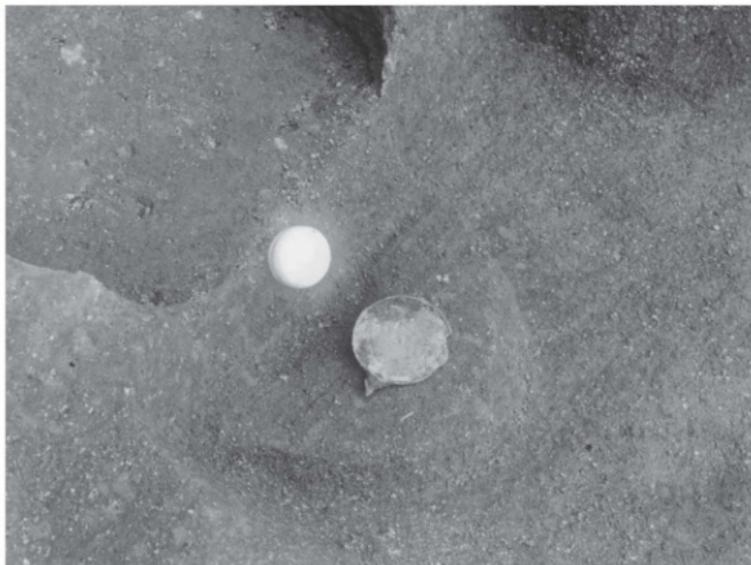
2. 土坑墓 S T201 完掘（南から）



1. 木棺墓 S T202 (南西から)



2. 木棺墓 S T202 副葬遺物配置 (西から)



1. 木棺墓 S T 202 副葬合子・和鏡・鉄刀子（南西から）



2. 木棺墓 S T 202 副葬土器（西から）



1. 木棺墓 S T203 (南から)



2. 木棺墓 S T203 (西から)



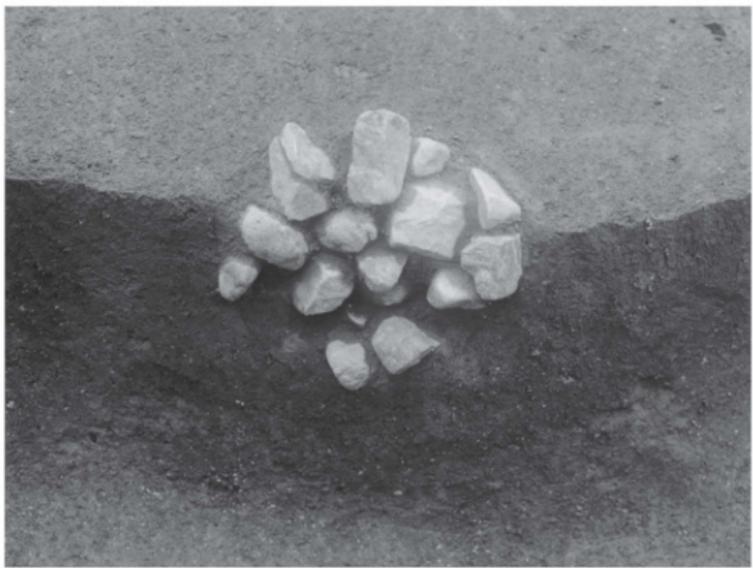
1. 木棺墓 S T 203 副葬土器配置（南から）



2. 木棺墓 S T 203 副葬土器（東から）



1. 集石遺構 S X201 (南から)



2. 集石遺構 S X202 (西から)



1. 第3遺構面全景（南から）



2. 第3遺構面全景（南西から）



1. 反転部第3遺構面全景（南から）



2. 反転部第3遺構面全景（南西から）



1. 積穴建物 S B301（西から）



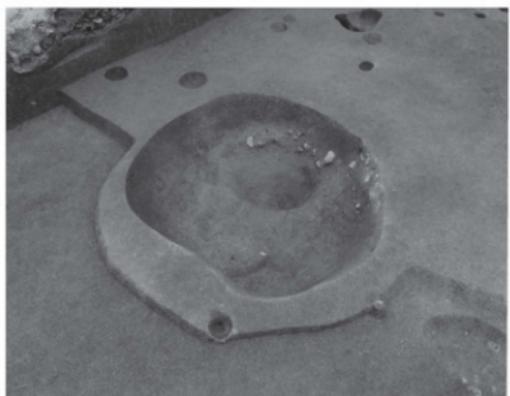
2. 積穴建物 S B301 断面（南から）



1. 土坑SK301・302（北東から）



2. 土坑SK303（南から）



3. 土坑SK304（北東から）



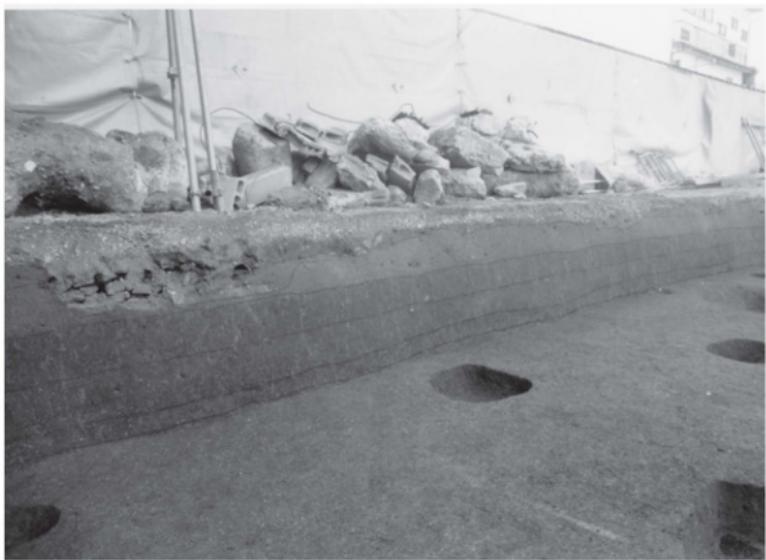
1. 土坑 S K304・306・307・
落ち込み S X301（北東から）



2. 土坑 S K305（東から）



3. 土坑 S K308（南西から）



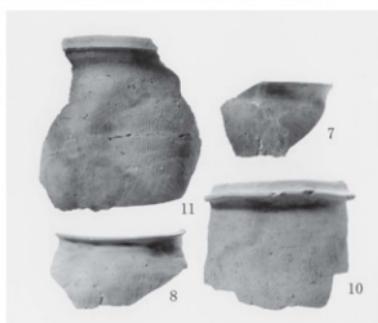
1. 南壁土層西半（北東から）



2. 南壁土層東半（北東から）



1. 掘立柱建物 S-B201 出土遺物

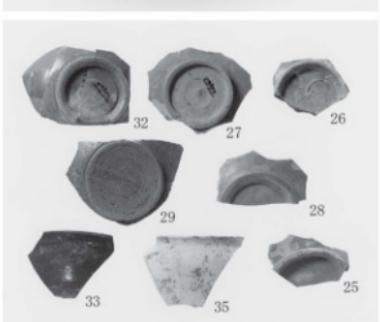


2. 井戸 S-E201 出土遺物 1





1. 井戸 S E 201 出土遺物 2



2. 土坑 S K 202 出土遺物 1



43



44

1. 土坑 S K202 出土遺物 2



47

48

50

49



52

2. ピット S P218・229・236 出土遺物

3. 土坑基 S T201 出土遺物



53



56



54



57



55

4. 木棺墓 S T202 出土遺物



60

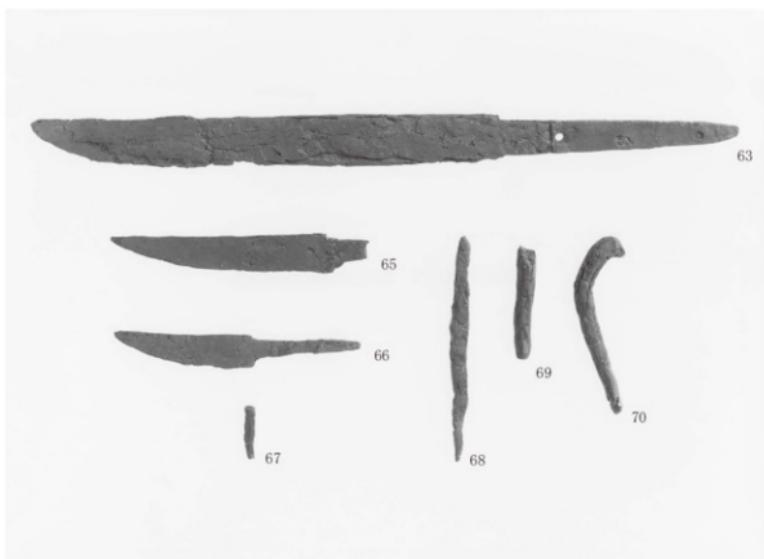


62

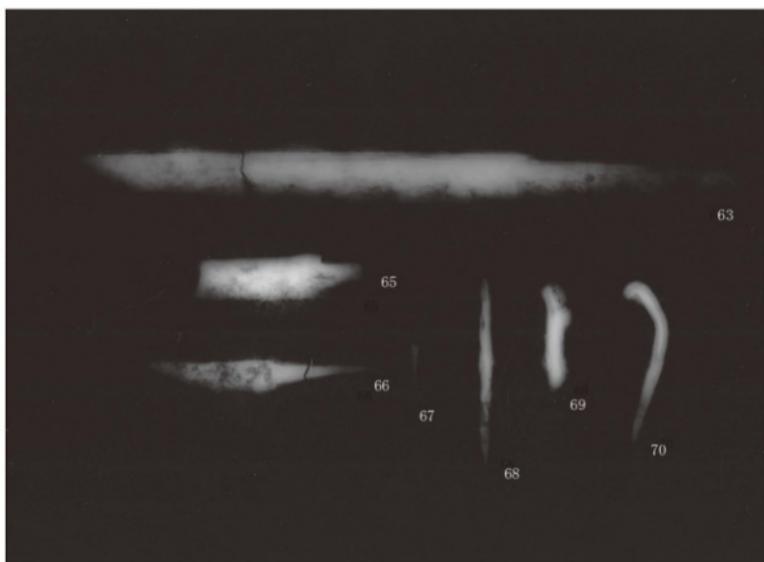
5. 木棺墓 S T203 出土遺物



61



1. 第2遺構面出土金属製品

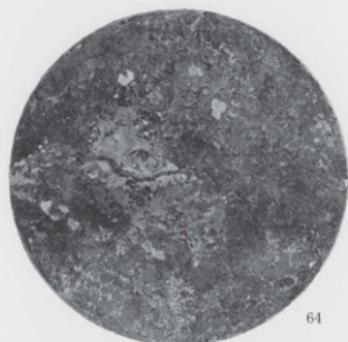


2. 第2遺構面出土金属製品（X線）



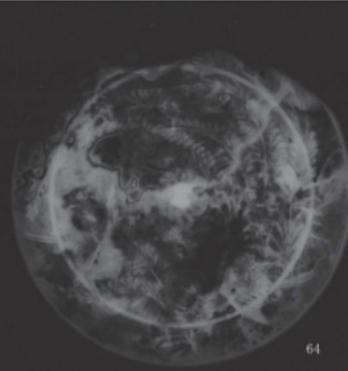
64

1. 木棺墓 S T202 出土和鏡鏡背



64

2. 木棺墓 S T202 出土和鏡鏡面



64

3. 木棺墓 S T202 出土和鏡 (X線)



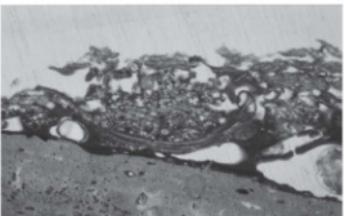
1. 和鏡鏡背平絹残存状況（マクロ：1.2倍）



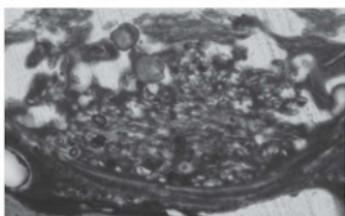
2. 和鏡鏡背平絹残存状況（マクロ：1.2倍）



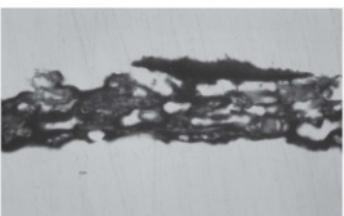
3. 和鏡鏡背平絹残存状況（マクロ：4倍）



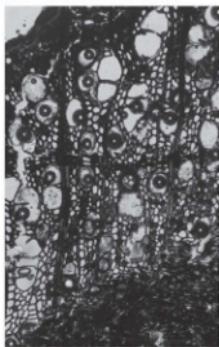
4. 平絹縫糸横断面（透過光：50倍）



5. 平絹縫糸横断面（透過光：100倍）



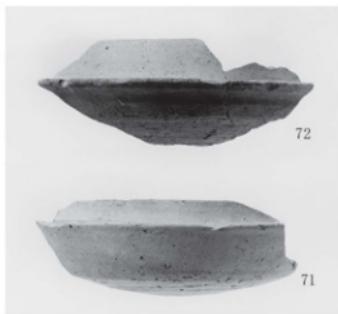
6. 平絹経糸横断面（透過光：50倍）



7. 鉄刀子 65 把木質木口断面
(透過光：50倍)



8. 鉄刀子 65 把木質板目断面
(透過光：100倍)



1. 落ち込み S X 301 出土遺物



2. 上層遺物包含層出土遺物 1





107



108



109

1. 上層遺物包含層出土遺物 2



118

119

121

120



125



123



126



124

2. 下層遺物包含層出土遺物 1



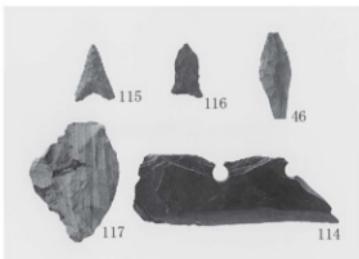
127



1. 下層遺物包含層出土遺物 2



2. 出土土錘類



3. 出土石器類 1



4. 出土石器類 2

報告書抄録

ふりがな	くすのき・あらたちょういせき　だい53じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	楠・荒田町遺跡 第53次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	閑野 豊(編・著)・中村 大介							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号							
発行年月日	西暦2014(平成26)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	地方公共団体	市町	緯度・経度		調査期間	調査面積	
所収遺跡	所在地	コード	遺跡番号	北緯 東経			調査原因	
くすのき 楠・ あらたちょういせき 荒田町遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 ひょうごあらたちょう 兵庫区荒田町 1-6・7	28105	04-23	34° 41' 12" 135° 10' 17"	120927 ～ 121130		1,260 m ² 民間の 共同住宅	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
楠・ 荒田町遺跡	集落跡	弥生時代	土器の集積	弥生土器	顕著な遺構はなし			
		古墳時代	竪穴建物・土坑 ・落込・ピット	須恵器				
		平安時代前半	井戸	須恵器・土師器 ・黒色土器 ・綠釉陶器 ・灰釉陶器				
		平安時代末～ 鎌倉時代初頭	掘立柱建物・溝 ・木棺墓・土坑 ・ピット	鉄刀子・和鏡 青白磁・土師器 ・瓦器	掘立柱建物3棟 ・木棺墓2基			
		鎌倉時代	掘立柱建物・ 土坑基・ 土坑・ピット	鉄刀・鉄刀子・ 青磁・土師器	掘立柱建物1棟 (建物規模大) ・土坑基1基			

楠・荒田町遺跡

—— 第53次発掘調査報告書 ——

2014年3月

編集・発行 〒650-8570

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

神戸市教育委員会社会教育部文化財課

TEL 078-322-5799

印刷・製本 株式会社クリアチオ

〒650-0041

兵庫県神戸市中央区新港町8-2 新港貿易会館4階32

TEL 078-332-0515